

CAMINOS-7 (*michi* : 道)  
(*Ensayos sobre la cultura de la peregrinación*)

Aiko Arai\*  
Bernardo Villasanz\*\*

ÍNDICE GENERAL

1. 「南米大陸、最果てのパタゴニアへの巡礼の道」(その一)  
CAMINO DE PEREGRINACIÓN A SUDAMÉRICA Y PATAGONIA.  
Por Aiko Arai (新井 藍子).
2. EL CAMINO DE LOS CRISTIANOS DE TAKETA (JAPÓN).  
(Ensayo sobre una hermenéutica cristiana del martirio)  
Por Bernardo Villasanz.

---

\* *Aiko Arai*. Ex profesora de la Universidad de Fukuoka (Japón).

\*\* *Bernardo Villasanz*. Catedrático Emérito (名誉教授) de la Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka (Japón).

# 1. 「南米大陸、最果てのパタゴニアへの巡礼の道」(その一) CAMINO DE PEREGRINACIÓN A SUDAMÉRICA Y PATAGONIA.

Por Aiko Arai (新井 藍子).

## プロローグ・チェ・ゲバラ青春南米旅行日記および愛読書

1月末から(2020年)、およそ、3週間かけて南米大陸、最果てのパタゴニアとマゼラン海峡を大型クルーズ船で巡った。

ヨーロッパ人、特に、スペイン人探検家、征服者の足跡をたどり、征圧された先住民の文明、社会、および現状を学び、且つ、スペインからの独立戦争の英雄たちを知るためである。

今回、南米大陸を旅するにあたって、真っ先に家の本棚から手に取ったのは、チェ・ゲバラの若き日の放浪の旅を綴った「南米旅行日記」と「第2回 AMÉRICA 放浪日記、ふたたび旅へ」の2冊であった。2004年に上映された映画「モーターサイクル・ダイアリーズ」を見て、これらの日記を読むことができたのである。映画の上映にあわせて急遽、出版されたのである。チェ自らが述べているように、旅へのほとんど強迫観念にとりつかれていた放浪と文学を愛した医学生時代および無事にブエノスアイレス医大を卒業して博士号を取った後のアメリカ旅行日記である。23歳から28歳までの愛(旅先で知り合った何人かの女性たちとのたわいない恋)と社会の不平等(大農園、鉱山、或いは、道路建設などで働く先住民は、500年前のインディオと同じように人間扱いされていないのを目撃した。ヒッチハイクで乗ったトラックでは、度々、インディオと一緒にしたが、ゲバラは白人というだけで警戒され、まともな返事がしてもらえなかった。)にこころ騒ぎ、革命的思想に傾いていく夢と若さ

に満ちた青春の紀行文学である。「果てしなく広いわれわれのアメリカ（南米大陸）の大地の地平線へと消えていく楽しい衝動……」の南米旅行に私のこころもまた、期待に躍動するのであった。

第1回目の旅では、アルゼンチン出身のゲバラは1951年12月、親友で医師のアルベルト・グラナドとともにおんぼろバイクとヒッチハイクで南米大陸を縦断しながら、数々の波乱に富んだ出来事とそれにとまなう試練、冒険をユーモラスに語っている。ゲバラが愛読していたドン・キホーテとサンチョの奇想天外な冒険を容易に彷彿させてくれるふたり組であった。ほとんどお金を持たずにブエノスアイレスを出発して、大西洋岸沿いに下り、パンパを横切り、アンデス山脈を越えてチリに入り、チリを北上してペルー、コロンビアを通り、最後にカラカスに到着するまでの8カ月間にわたって走り、歩いた。幾たびかの夜は野宿（安いホテルでも、ブルジョアのように、快適なベッドで眠るぐらいなら死んだほうがましだと考えていた。たいていは、訪問先の医師たちの病院の廊下とか、度々訪れたハンセン病治療所で提供された場所で眠った。有言実行のチェは生涯、そのとおりの人生を生きた）して寒さにふるえ、2歳から患っている喘息の発作に苦しみながらの旅であった。上記にも少しふれたが、旅先で出会ったインディオに強く関心をひかれた。

たとえば、ペルーの海拔5000メートル近くの地点では、ブーツとウールの靴下を履いていたにもかかわらず、激しい寒さのあまり指が全部こぼぼってしまう感じがしていたのに、インディオたちは固くなった足の裏を全くものともせず地面を踏んでいくのを見てゲバラは、驚異を覚えた。また、ある個所では、インカの権力に対して何度も蜂起した、あの誇り高い民族であったアイマラ人は、今では、打ち負かされた民族で、自分たちを眺めるその目つきはおとなしそうで、ほとんど怖気づいているような、完全に無関心な目つきだ。生きるといことが取り扱うことのできない習慣なので生きているかのように見え

る人びともいる、という鋭い観察をしている。また、ペルーのハンセン病療養所のある小さな村の農園主がケチュア語を話すインディオのガイドを道案内につけてくれた。ゲバラたちは、用意された馬に乗っていたが、徒歩のガイドが、主人に言いつけられて重い荷物を全部持ってくれた。この地方の裕福な人びとの考えかたでは、たとえ徒歩であっても、召使いが全部の荷物とあらゆる旅の不便さをしょい込むのが当たり前なのである。主人から見えなくなった曲がり角でガイドから荷物を全部引き取ったゲバラたちをガイドは、ただ不思議だという顔で眺めていたというエピソードは、前回の拙書「中米およびカリブ海諸島への巡礼の道」で述べた、およそ、500年前にラス・カサスが度々、目の当たりにしたという光景を彷彿とさせるものである。スペイン人の重い大砲や船の錨をかつがされていた何百人もの裸のインディオたちを.....

インディオだけではなく、チリのチュキカマタ銅山でのチリ人の労働者夫妻との出会いも、物事の本質を理解できない貧しい人たちが真に欲しているものが分かった一瞬であったろう。彼らは共産主義者だった。悲痛な雰囲気を漂わせて、刑務所で3カ月過ごしたことや諸々なことを語ってくれた。砂漠の夜で凍えきって、折り重なるようにして寝ている夫妻には薄い毛布一枚さえなかった。だから、自分たちのを一枚貸してあげた。「世界中のプロレタリア階級の雄弁な代弁者だった。.....この時は、僕が最も寒い思いをしたうちの1回だったし、また同時に、僕にとって奇怪なこの種の人間に、僕も少し似通ってきたかなと思った時でもあった。」(エルネスト・チェ・ゲバラ、南米旅行日記)そして、ゲバラはこう考える、共産主義という本質を理解できないであろうあの労働者にとって「貧しい人にパンを」という言葉なら分かり易く、あるいはむしろ、これこそが彼の人生を意味あるものにしてているのだと.....

この第1回目の南米旅行は、「.....あてどなくさまよう旅は、思った以上に僕を変えてしまった。少なくとも内面は、前と同じ僕ではない。」(エルネスト・チェ・ゲバラ)という認識にいたった革命家ゲバラの原点の旅となった。

これをテーマにしてブラジル人のバルテル・サレス監督が5年かけて上記に記した映画を2004年に完成させた。ゲバラの書いた原作もすでに読んで感銘を受けていた監督は、南米各地の風景を織り込んだ異色のロードムービーに仕上げた。当時の新聞のインタビュー記事(2004年10月19日)によると、最初の3年をリサーチに費やし、1万2千キロの行程を2回旅した。ゲバラの家族や関係者に何度も会い、話しを聞いた。アルベルト・グラナドとのインタビューは10時間にも及んだ。撮影では、パタゴニアからアマゾン奥地まで4カ月かけて走破したという徹底ぶりである。それほど、ゲバラの現実を見つめる真剣なまなざしに共感を覚え、こころが揺り動かされたのであろう。この旅はゲバラの自己発見の旅であるばかりではなく、ラテンアメリカの真の姿を探る旅にもなっていると語り、最後に「物事はもう何も変えられないと、多くの人々が口にする今の時代にこそ、人間らしい生き方を求め、理想を大切に生きたゲバラの原点を知ってほしい」と訴えた。

16年前の映画とは言え、残念ながら、映画の中の南米各地の風景や登場人物をこころに刻みつけられなかった。今回の短い旅では、どれくらい南米の現状を知ることができるのであろうか。しっかりと眼とこころを開けていないと.....

「第2回 AMÉRICA 放浪日記」は、1953年6月、25歳でブエノスアイレス大学を卒業し、医師資格を取得した後のチェの中南米旅行日記である。7月には、約束していたとおりに、親友アルベルト・グラナドがいるベネズエラの病院で働くためにブエノスアイレスを列車で出発した。今回の同行者は、幼年期からの友人、カルロス・フェレールである。11月には、ペルー、エクアドル、パナマ、コスタリカ、ニカラグア、ホンジュラス、エルサルバドルを経て、グアテマラに到着した。第1回目の日記でも明らかのように、ゲバラは考古学に非常に興味があり、知識も豊富であった。特に、ペルーのマチュピチュ遺跡の

重要性については、こう述べている、「……考古学的・観光的な重要性において、この地域のあらゆる場所をしのぐのはマチュピチュである。(エルネスト・チェ・ゲバラ、南米旅行日記) 特に、ケチュア建築の巨大な石のかたちや細工に注目し、今回のパナマ滞在中には、雑誌に論文「マチュピチュ：アメリカの石の謎」を執筆している。

グアテマラ滞在中に、サンティアゴ・デ・クーバの政府軍モンカダ兵営をカストロとともに攻撃し、失敗した亡命中のキューバ人と知り合う。初めてのキューバ人との接触はゲバラにとって大きな意味を持っていくことになる。この頃、以前から興味を持っているラテンアメリカ古代文明書をはじめ、エンゲルス、サルトルなどを読む。サッカーを好むスポーツマンのゲバラは、第1回、2回の放浪中、度々、サッカーをしたり、高い山々の登山を繰り返していたが、たいへんな読書家であり、文学も愛していた。文学好きな私は、それについては、日記の中で政治的、思想的に重要なポイントを述べ終わってから、詳しく見ていきたいと思う。というも、第2回目の旅行日記では、ゲバラの思想的変容過程が明らかになっていくからである。しかし、同時に、ゲバラ特有の皮肉の混ざったユーモラスな人間観察や軽快な若々しい文体があちこちに見られる。特筆すべき点は、ゲバラの生活のすべての活動において、より一層注意深い観察者になって、人間が重要な意味を持つてくることである。そのせいか、この日記では、たびたび、「口を利くチャンスのあった興味深い人びとは、誰ひとりとして知り合いになることができなかった」、「ここ何日かは興味深い人物には全然出会っていない」、「近頃は興味深い人には全然出会っていないが、この生活を続けていたのでは永久に知り合うことがなさそうだ」と切実な思いが書かれていることである。

1954年9月に、グアテマラからメキシコに到着したゲバラは、1955年8月頃、ついに、フィデル・カストロと運命的な出会いをする。アルベルト・グラナド

は序文で「まったく偶然に、あの厳しい8月にフィデルに出会い、彼の中に、求めていた安らぎと救いを見出したのだ」と、感想を述べている。(第2回 AMÉRICA 放浪日記) ふたりの出会いをゲバラ自身は、こう記している「政治的な出来事といえば、キューバ人革命家のフィデル・カストロに出会ったこと。若くて聡明で、非常に自信家であり、普通では考えられないような勇敢さを持った青年だ。お互いに気が合ったと思う。」と。アルベルトの言葉を借りれば、この時期、「学者と放浪者と革命家を少しづつやっていた」ゲバラは、暴力には、武器をとという大きな飛躍を迎えたのであろう。その後のカストロやキューバ人亡命者たちとの「交流」は、記述されていないが、沈黙の中にこそ重要なことが隠されているのであろう。年末には、結婚したイルダ・ガデアとユカタン半島を旅行し、ウシュマル、チチェン・イツァなどのマヤ遺跡を訪れ、ここでも、遺跡に対する並々ならぬ興味と知識を披露している。今、私が手にしている本には、ゲバラ自身が撮影した当時の神殿、城、球戯場、天文台、ジャガーの広場、聖なる沼(セノーテ)などの美しい写真が載せられている。メキシコでは街頭写真家で生計を立てていたほどの腕前なのである。カストロに会うまでは、この才能ある青年は、「僕のプロレタリア的生活の特徴である、期待と裏切りの連鎖が毎日繰り返されるなか、日々が過ぎていった。」(エルネスト・チェ・ゲバラ、第2回 AMÉRICA 放浪日記)この頃には、マルクス、レーニンらの本を読んでいる。

1956年になると、来るべきキューバ遠征隊はメキシコの或る農園を借りて軍事訓練に励むようになる。この年もゲバラは、登山を繰り返し、ポポカテペトル山に登ったりした。また、いつものように、多数の本に親しみ、経済学、ソビエト文学、ラテンアメリカ現代史、「征服」に関するクロニスタの諸記録を読んでいる。

1956年末以降、ゲバラの新しい歩みが始まる。11月25日、キューバのバスタ独裁政権打倒を目指して、ゲバラを含めた82人のキューバ遠征隊員を乗

せたヨット「グラマン号」がメキシコ、トゥспан港を出港してキューバへ向かった。

日記の他にも、家族にこまめに手紙を書いていたゲバラであるが、母親宛ての手紙には、日記に書いていないような嘘偽りのない心情が吐露されているので、少し、拾って見てみたい。息子に対して、節度を持てとか自分のことを考えろとかいう母親の手紙に（1956年7月15日、メキシコ）、「.....そんなものは結局は低俗で臆病な個人主義なんだよ。.....僕はそんな存在は自分の中からうち消そうとたいへんな努力したんだ。.....理想を同じくする仲間たちと僕とは、完全に一心同体となっていた。.....《私》という概念が完全に消滅して、《われわれ》という概念にすり変わったというのだ。あれは共産主義精神だったんだ。.....キューバで悪を正したあとは、間違いなくどこかしらほかの場所に行くよ。官僚的なオフィスの中やアレルギー病棟なんか閉じこもっていたら、気が減入ってしょうがなくなるのは分かり切ってるんだ。」日付のはっきりしない手紙ではあるが、「いまだにメキシコから、母さんが以前書いてくれた手紙に返事を書いています。.....夢見ていたようなのは全然違う種類の放浪になるだろうね。新しい国に行っても、もうそれはその土地を歩き回ったり、博物館や遺跡を見たりするためじゃなくて、それにとどまらず（だっていま書いたようなことはいつでも興味があるからね）、人民の闘いに身を投じていくためなんです。」と、来るべき闘争を示唆し、決意を表明している。また、1956年の8月か9月の手紙では、「僕の道は、徐々にだけど確実に、病院での医療からずれていってるみたいだけど、.....今後のことについては、何も話せません。」同年、10月頃の手紙には、研究を続けてきた医学の本を書く予定にしていたが、「まずは一番重要な義務を遂行し、腕に盾を抱き、なにもかも全くの思いつきで、物事の秩序に逆らっていこうと決めました。本はそのあとにでも書くさ、もし風車で気が狂ったりしてなければね。」と、革命をキホーテ的な冒険としてとらえているようなふしがみられる手紙である。しかし、他



の所では、そういう批判に対して、「...ぼくのことを冒険家というのなら、たしかにそうだ。しかし、ぼくは違うタイプの冒険家だ。自分の真理を証明するためなら、命も賭ける冒険家だ」(チェの下で働いていた技師、アンヘル・アルコス・ベルグネス)と、語っている。そして、死を覚悟したかのように、手紙の最後はこう結ばれている、<死を前にした>もの悲しさは避けたいから、この手紙は本当にいよいよというときになってから出すことにしましょう。.....そして闘いは逃げ道のないものとなり、国歌で唄われているように、勝利するか、さもなくば死ぬまで続くでしょう。」(エルネスト・チェ・ゲバラ、第2回 AMÉRICA 放浪日記)

愛する母親への手紙は、ここで終わってはいない。もう少し先で、それを見ることにしたい。

1959年1月2日、チェがハバナに入り、カストロはサンティアゴ・デ・クーバに入り、革命は成功した。その年、31歳で国立銀行総裁に就任した。33歳で工業相になってからのゲバラは、多忙を極め、1日2、3時間しか眠らず、いつも他人に手本を示すような仕事ぶりであった。しかし、社会を変革し、人間的社会主義をめざし...といった議論や活動家としての言動はいつも物議をかもし、人民社会党員から嫌われた。自分に対してだけではなく、他人に対しても、極端なほど厳格だった。更に、たったひとりで経済理論を練り始めたことにより、キューバの政界からますます孤立していった。しかし、カストロは、このアルゼンチン出身のキューバ人の率直さ、絶対的な倫理観によって国民に絶大な人気があることを承知していたので、黙認していた。医者が患者に手を差し伸べるように、身近に困っている人がいると、惜しまず手を差し伸べた。金に困っている者には、用立ててやったりもした。

事実上、内政から締め出されたチェは、キューバを代表して外遊の旅に発った。1964年12月、ニューヨークで開かれた国連総会で、自分はラテンアメリカの人々のために命を投げ出す覚悟だと表明した。この宣言は、ふたたび闘争

に身を投じたいという、チェのやむにやまれぬ欲求の前触れだった。

1965年2月、アルジェリアの首都アルジェで開かれたアジア・アフリカ経済セミナーに参加した。中国、ソ連を含む35カ国を前にして、ソ連と資本主義国との関係は金儲け主義的な側面があると演説した。ソ連に対するこの非難によりたいへんな論争を巻き起こした。チェは演説の前にカストロと相談していなかった。カストロがハバナからテレックスで、読むのをやめるように忠告してきたのは、チェが演壇に立つ少し前だった。この演説に仰天したソ連は、ただちにハバナに使者を送り、「異端者」チェを追放するよう要求した。

後で、チェは個人的見解であると、説明せざるを得なかった。

カストロとチェは決裂した。カストロはすべてにおいて目標を定める決定権をもつ最高指導者だった。チェが国際舞台で自分に代わって語ることに我慢ならなかった。カストロにとって、自分だけがキューバを代表する声でなければならなかった。一方で、チェはキューバに留まるつもりはなかった。チェの運転手兼ボディガードだったアルベルト・カステジャノスの証言によると、チェは、ラテンアメリカ大陸の解放のために、資本主義と闘うための核を各地に作っていた。キューバ革命が成功した後でも、南米大陸の革命を考えていた。アルゼンチン、ブラジル、ペルー、パラグアイの国々の国境がひとつの戦略地点で、ボリビア（1967年、ボリビアのゲリラ戦で捕らえられ、処刑される）はその過程に過ぎなかった。

ドグマを超えて、チェが求めていたのは「人間」だった。中米、南米を何年もかけて放浪して学んだことだった。たくさんの人びとが、人間としての尊厳を踏みにじられ、人間扱いをされずに、しいたげられて生きているのを見てきた。日々の糧を得るために苛酷な労働を強いられている人びとを見てきた。文学を愛する人が持っている特有な、人間の本质を一瞬にして見抜く眼識力で世界を眺めたチェは、世界をより公正に、より人間的なものに変えたい

と、強く思うようになっていった。チェにとっては、人間とは、自身の尊厳を守りぬくことが出来る、自由で誇り高い存在であらねばならなかった。

1959年にキューバ革命が勝利した翌年、1960年にキューバの医学生と労働者に向けて演説を行った。医学生から政治活動家へと変貌した自身を「医師の任務について—私はすべてを旅で学んだ」(公衆衛生省研修過程開設式における演説、1960年8月19日)というタイトルで語っている。チェ自身のいくつかの言葉を拾ってここに、紹介してみよう。長—い演説ではあるが、とても重要なので、核心の部分だけでも意味があるだろう：「.....医学を学び始めたときには、今日、革命家としての私が抱いている考えの大部分は、私の理想の中には含まれていなかった。...高名な研究者になって、人類の役に立つような何かを成し遂げるために、たゆまず働き続けることを夢見ていたのだが、当時その夢は個人としての成功を意味していた。...私自身、平々凡々たる人間だったのである。.....米州(ラテンアメリカ)旅行を開始し、すみずみまで知るようになった。最初は学生として、後には医者として旅をしたわけだが、.....きわめて身近に接するようになったのは、貧困や飢えや病気や、手のうちようがなくて子どもを治療してやれないような状況や、.....そんな状況は、われわれの故郷である米州諸国のうちのめされた階層では、日常茶飯事のことだ。そのとき私は、...医学の世界で重要な業績を残すとかと同じぐらい大切な何かがある、ということに気づき始めた。それは、そういう人びとの力になるということだった。」そして、チェは革命的医師になることを決意した。「.....革命的医師とは、医者としての専門知識を革命のため、人民のために用いる人のことだ。」個人の取り組みと社会の要請とを一致させるには、各々が新しい種類の人間を創り出さなければならない、と強調した。今、この小さなキューバでは、飢えと貧困にあえいでいた子どもたちも「公立学校で読み書きから職業訓練、革命家になるためのとても難しい学問までを学んでいる。これこそ、キューバに生まれている新しい人間だ。」更に、今日の話のテーマである医師とその他の医療関

係労働者を革命運動の中で養成する大切さを述べた。これからの医師の役割は、どうにかして武器を掴んで戦いの前線に出て行くというのではなく、「医師はつねに医師でなければならない。それは、現存する実に素晴らしい仕事のひとつであり、戦争の中でもっとも重要な仕事のひとつである」革命と個人については、集团的意志や集团的発意を画一化するものではなく、革命は個々の能力を解放するものだと、ちらとチェらしい考えも述べている。

さあ、今度は、文学を少年の頃からむさぼるように読んできた幸せなチェの話しをしよう。どこの世界でも、歴史的にいて文学とは「教養」であり、余裕のある階級の特権であった。1928年、チェは裕福な家に生まれた。母親は、重い喘息のため学校に通うことのできないチェに家で勉強を教えていた教養のある人だった。勉強の合間には、「トム・ソーヤーの冒険」、「ハックルベリー・フィンの冒険」などを読んでいた。14、5歳でフロイドを読んでいたという話もある。

スペイン語圏の著作では、セルバンテスを愛し、世の中の不正をただすために槍を手に持ち、ロシナンテにまたがって、果敢な冒険に挑むドン・キホーテに自己を投影していたようである。キューバのシエラ・マestra山中でのゲリラ活動中に読み書きのできない部下たちにセルバンテスやスチープソンを読んで聞かせてやっている。

1965年4月1日、盟友カストロとキューバ革命のためにみずから身を引く道を選んだチェは、有名なカストロへの決別の手紙を残してキューバを去った。その前の3月16日付けで、両親にも自身をドン・キホーテになぞらえてつぎのような手紙を書き残している、「もう一度、ぼくはロシナンテにまたがり、かかたでその肋骨を感じています、槍を手に、ぼくはふたたび旅に出ます。10年ほど前にも、ぼくは別れの手紙を書きました。……」

私は、マルクス主義者の革命家、チェ・ゲバラはあまり信じられないが、文

学を愛し、セルバンテスを愛したチェを信じることはできる。余談になるが、息子を心から信じていた母親のセリア・デ・ラ・セルナは、息子に再会することなく、およそ、1カ月少し経ってから亡くなった。ずっと後になってから、コンゴの密林でその死を知ったチェは、しばらくじっと座っていたが、それから、子どものころの思い出話を同志たちに話し始めた。そして、いきなり、アルゼンチンのタンゴを口ずさんだ。まるで泣いているように.....

南米旅行中でもゲリラ活動中でも常に本を携えていた。ボリビア山中にもトロッキーの著作を持って行った。

とりわけ、詩を好んでいた。暗唱できるほど読みこなしていた。スペイン留学中に学び、私のところをふるわせた詩人たち、詩のタイトルをふたたび、ここに列挙できる喜びは大きい。また、チェが好んで読んだ理由もここには、見えてくる。数多くの詩人の中で以下の主だった詩人たちについて述べてみたい。

まず、「旅人に道はない 歩きながら 道をつくっていく、後ろをふりかえれば 道が見える 決してふたたび 踏むことのない」と謳ったスペインの詩人、アントニオ・マチャド (1875-1939年、98年世代の代表的作家) 詩集「カステイーリャの荒野」は、憂愁にみちたカステイーリャ地方の光景の描写が美しい。スペイン内戦勃発後、39年にフランスに亡命する。ルベン・ダリオ、オスカー・ワイルド、ウナムノなどと交友関係があった。ベルグソン、ハイデッガーの影響を受け、マチャドの全ての詩の底辺には、実存することへの不安が漂っている。

ガルシア・ロルカ (スペインの詩人、劇作家、1898-1936年) 「ジブシーのロマンセ集」、「血の婚礼」、「イェルマ」など。1936年7月、共和国政府に対する軍人たちの反乱を契機に国をにぶんする内戦が勃発した。ロルカのいたグラナダで勃発の混乱期の8月に、ロルカは反乱軍により処刑された。まだ38歳であった。すでに、文学の世界で頭角を現しはじめていたので、スペインは

もとより、世界中に非難の嵐を巻き起こした。

ロルカは政治には、関与していなかったが、日頃から自由主義的な言動をしていた。詩行からもそれがうかがえる。ロルカが生前語っていたとおり、死後も強烈な存在感を漂わせている。「.....スペインでは、...死が来ると、人びとは、壁の外に出、太陽の下に現れる。死はスペインでは他のどこにおける死よりも、生命力にあふれている。」(ガルシア・ロルカ)

パブロ・ネルーダ、チリの詩人(1904-73年、71年ノーベル文学賞を受賞)「20の愛の詩と1つの絶望の歌」で詩壇に登場。20歳の時の愛と生のよろこび、苦悩をテーマにしたみずみずしい清新な詩は、多くの若ものの心情に訴えかけてくるものがある。上記のガルシア・ロルカと親交があった。共和派にくみしていた。新世界の自然と歴史を主題にした叙事詩「大いなる歌」、「百の愛のソネット」、「イスラ・ネグラの手帳」の他にも、「ニクソン殺しの勧め」(73年)など多くの政治詩を発表した。アジェンデ左翼政権の下で、大使としてパリに赴任したこともある。ピノチェト将軍による軍部のクーデタ直後の1973年9月、首都サンティアゴで死亡。

セサル・バリエホ、ペルーの詩人、小説家。(1892-1938年)スペイン内戦を体験し、パリに亡命。「人間の詩」、「スペインよ、この盃を私から遠ざけよ」とともに1939年の作品には、マルクス主義とカトリシズムを融合させた人類愛の思想が見られる。そのほか、鉱山労働者の現実を告発した「タングステン」のような小説も書いている。

ホセ・マルティ、キューバの詩人、思想家、革命家。(1853-95年)16歳で独立運動に入り、キューバとラテンアメリカの解放運動に生涯を捧げ、<キューバの使徒>といわれた。その間も詩作、小説、多面的な評論活動も怠らなかった。何冊かの詩集は<モデルニスモ>の先駆詩と評価されている。すぐれた思想家であったマルティは、いち早く<帝国主義>と規定した北アメリカを<彼らのアメリカ>と呼び、<われらのアメリカ>であるラテンアメリカ

と対置させた。その先見性は高く評価されている。また、革命家としてのマルティは、1892年キューバ革命党を結成した。同党は民主主義的な綱領と機能を持ち、当時としては、きわめて近代的な政党として、ヨーロッパの労働者政党にさえも先んずるような組織であった。後に、このマルティの名前を冠した栄誉ある勲章を贈られたチェは、黒いベレー帽に飾り、生涯の誇りとした。

チェは、スペイン内戦を体験した詩人たちや独立運動の革命家に強い関心を抱いていたことが分かる。真の詩人たちの言葉には、かがやきが見えると、チェはどこかで述べていた。どれくらい言葉そのものに強い力が秘められているか、チェの生の軌跡と愛読書から分かってくる。いみじくも、それを、ボルヘスが的確に言い表している、「生は詩から成り立っている」と。あのステューヴンソン、チェがシエラ・マエストラの山中で読み聞かせた、「ジーキル博士とハイド氏」の作者、ステューヴンソンも「詩の素材は単語であり、それらの単語は人生の言葉そのものである。……詩人はそれを魔術的なものに変えてしまう。」と。更に、ボルヘスは「律法書」の第一章の「神は言った、＜光あれ＞。そして光が生まれた」。＜光＞という語に、世界全体に光を行き渡らせるのに十分な力が、つまり、光を生じさせるのに十分な力が備わっているのは、彼ら（ユダヤ人）にとって自明の事柄なのです、と語っている。（詩という仕事について、J.L. ボルヘス）

同じアルゼンチン出身の異色作家であるボルヘス（Jorge Luis Borges、1899-1986年、詩人、小説家、評論家）は、人間の運命が無限に反復するという迷宮の世界を描きつけた。＜迷宮＞の基盤になっているのは、この宇宙を支配する円環的時間である。存在するものは、天体と同様、それが描く円を無限に巡ることになり、これこそ不死の時間と言える。幻想豊かな短編集には、「アレフ」、「伝奇集」、「砂の本」などがある。詩集には、「創造者」、「群虎黄金」、「暗号」などがあり、評論集には、「詩という仕事について」、「七つの

夜」がある。この2作は、講義や講演の記録をまとめたものである。分かりやすい言葉で詩学および「すべての人間に通じるテーマ」をとおして文学に対する情熱や愛の必要性について繰り返し語っている。

ペロン独裁政権下（1946-55年、73-74年）では、ボルヘスは執拗な圧迫を受けていたが、現実との間に距離を置くボルヘスの態度は、若い作家たちから非難的となっていた。しかし、一方で、迷宮的世界において生のうちに潜む永遠なるものを幻想的に表現する文学的姿勢は高く評価されている。

チェ・ゲバラが、大学の医学部に入学し、卒業して医師の資格を取ったのが、ちょうどこのペロン政権下であった。第1回目の南米旅行中では、チェと連れのアルベルトがペロンを批判する会話があちこちに見られる。結局、旅が終わっても、アルベルトはアルゼンチンに戻らず、ベネズエラで職を得た。チェが医師の資格を得てから、もう一度、南米大陸へ放浪の旅に出たのは、ペロン政権下で医師になることを拒否したためである。この旅の間中、チェは、常にアルゼンチンの政治の動向を気にしていた。チェがボルヘスの文学に親しんだのは当然であった。

今回、「タデオ・イシドロ・クルスの生涯（1829-74）」という短編小説（1944年）をばらばらと読み直して、はっと胸をつかれた。そこに登場するクルスという男の姿が、何もかも捨ててキューバを去ったチェの姿に重なったのである。警察隊長タデオ・イシドロ・クルスは取り押さえようとした一瞬間に殺人犯マルティン・フィエロ（アルゼンチンの gaucho 文学の傑作叙事詩〈マルティン・フィエロ〉の架空の主人公）の中に、かつての自分の行為の反映、すなわち、おのれの正体を見抜いた、「...およそ人生は、それがいかに長くまたいかに複雑であろうとも、本質的には「ほんの一瞬間」一人が決定的に自分の正体を見抜いてしまう瞬間—に凝縮されている。」クルスは追跡する群れをなす犬ではなく、孤立する狼こそが、自分の真の運命なのだ、と。そして、相手の男こそまさに自分自身であることを理解した。クルスは軍帽を投げ捨て、脱走兵



マルティン・フィエロと共に、部下の兵士を向こうにまわして戦い始めた。

チェの愛読書のひとつでもある「 gaucho 文学」の gaucho は、アルゼンチンとウルグアイにまたがるパンパの牧童のことである。馬で牛をおいづめ、投げ玉でしとめる作業は、とても危険である。そこで、乗馬術にたけた勇敢な gaucho が生まれた。gaucho は「勇気の象徴」となった。男らしさは、「アルゼンチン＝ブエノスアイレス魂」のもうひとつの不可欠な要素なのである。チェが、真のアルゼンチン魂を発揮したのは、最後の瞬間だった。撃つのをためらっている死刑執行人に対して、手の平を振って促したと言われている。死後、人びとの心に強く焼きついたのは、あの最後の静謐をたたえた眼差しであった。

キューバのシエラマエストラで一緒に戦ったキューバ兵で、ボリビア山中のゲリラ戦でもチェの部下であり、無事に襲撃を逃れて、キューバに戻った兵士のひとは、語っている。チェはキューバ革命の時の彼とは、すっかり変わってしまった。常にいらいらしていて、不機嫌であった。部下のだれにも打ち解けず、親しく話すようなことはしなくなったと。チェはずっと前（たぶん、キューバ政界で孤立していった時期）に気がついていたのではなかろうか。共産主義という全体主義の中で、自分が孤立した狼であるというこを.....

長いプロローグになってしまった。1956年、チェがメキシコを出港してから現在（2020年）まで70年ちかく経ってしまった。さあ、これから、私と一緒にエッセイを読んで下さる読者の方々と旅をしましょう！メキシコからウルグアイ、アルゼンチン、およびマゼラン海峡を通過してから南下を続け、南米大陸最南端のホーン岬をぐるっと回り、パタゴニア海峡とチリのフィヨルドを北上して、サンティアゴ・デ・チリに到着するまでの旅を！

前回の中米、カリブ海諸島でスペイン人の探検家、征服者の足跡をたどったように、今回も彼らの跡を追ってみるつもりである。さらに、チェが訪れたメ

キシコ、アルゼンチン、チリの国々に現在、居住する人びと、先住民などの社会的状況を知りたいと思っている。あれから、どれくらい変わったのであろうか。それを知るためにも、時々、知的好奇心でいっばいの放浪と文学を愛した、あの青年にも登場してもらいたいと、願っている。

第1日目、メキシコシティ、メキシコ

1月30日（木）

標高およそ、2200メートル以上のところにあるメキシコシティのベニート・フアレス国際空港に到着したのは、30日の午後12時を少し過ぎていた。日本との時差は15時間もある。同日、30日の羽田から成田までの間、左側に見えていたのは、かなりの部分が雪におおわれた富士山であった。久しぶりに見た富士山は、威風堂々としていて、神秘的な優美な姿を真っ青な空を背景にして屹立していた。この息をのむような美しさは、これから先の旅の幸運を暗示してくれていた。その直感は当たっていたのである。

ラテンアメリカ発着空港にしては、ベニート・フアレス国際空港は、小さいという印象を持った。空港につけられているベニート・フアレス（Benito Juárez-1806-72年）は、メキシコの〈建国の父〉と呼ばれている、1861年に就任し、67年に再選された大統領の名前である。サポテコ族出身である。サポテコ族とは、メキシコ南部のオアハカ・デ・フアレス州の先住民集団である。スペイン人の征服前には、高度の文化を発達させていた。すでに、前2世紀には、高度な農業技術を持っていた。貴族と司祭を上にとりださず階層社会が成立していた。20世紀後半には、5歳以上でサポテコ語を話す人口は、およそ22万にのぼると言われている。

ベニート・ファレスは13歳までスペイン語を話さなかった。政界に入ってから、先住民社会の保護、師範学校創立、軍隊再編を手がけた。軍人、教会の特権を廃止した〈ファレス法〉を制定した。また、〈レフォルマ法—Leyes de Reforma〉を断行して教会と国家の分離を図って、教会財産の国有化、教会の権力がおよばない、数々の民法を立案した。このような、急進的政策を行ってきたファレスに〈建国の父〉という名前が与えられたのも当然である。

空港からホテルまでは、わずか15キロほどの距離だが、幹線道路は混み合っていた。バスは遅々として進まない。40年以上、メキシコシティに住んでいる日本人女性ガイドの川原さんによると、1日中、このような状態であるという。特に、午後の1時から4時までがラッシュアワーである。その理由を説明してくれた、「今、メキシコシティは犯罪組織が横行しているとても危険な町です。親は登校、下校に子どもたちを1日2回、車で送り迎えしています。小さな子どもたちばかりでなく、大学生の子息たちまでも同じように、送迎しています。スペイン語の離せない旅行者が、流しのタクシーを拾うと、どこかに連れ去られてしまう、そんな危険な町になっています。」40年以上もここに居住している彼女の話しには、信憑性があった。事実、メキシコでは年に8万人が誘拐されているという報道(2020年4月)があった。道路が混んでいるもうひとつの理由は、メキシコでは、現在でも、車はステータスシンボルとして、誰もかれも車を持ちたがっていることにある。立派な地下鉄や公共乗りものであるバスがあるにもかかわらず、見栄をはりたがっているようである。日本でも、そんな時期がかなり前にあった。今では、若ものは全然、車に関心を示さなくなっているが.....

メキシコ社会は依然として、ほんの一握りの桁外れの富豪(世界で知られている)と少しの中流階級と大部分の貧困層から成り立っていると、川原さんの説明は続く。およそ70年前にチェが目の当たりにしたラテンアメリカの状況

と何ら変わっていない。スペインの高名な哲学者、ホセ・オルテガ・イ・ガセツトが述べているように、「正義と真理」などすべての精神的所産も、物質でつくり出される曇気楼なのだろうか。チェが相手にして戦ったのは、ドン・キホーテが巨人と思いこんだ風車だったのであろうか。オルテガは言う、人間がはじめて巨人のことを考えついたのは、「本質的にはなにもこのセルバンテス的情景と変わりはないのである。いつの場合でも、実は巨人でないなにかに当面していたのだが...」(1883-1955年、<ドン・キホーテをめぐる思索>)と。

昨年から、度々、報道されている中米、とくに、ホンジュラス、グアテマラからのキャラバン隊は、今年(2020年)1月になってもどんどん増えているようである。1月だけでも、2万人がメキシコに到着している。北アメリカに渡ろうと、そこで待機しているのである。彼らは、メキシコの現状をよく知っているらしく、メキシコ政府が手を差し伸べようとしても拒んでいる、食料の差し入れをしても、そんなものは食べられないと文句を言っていると、メキシコ人が憤慨していた。

ふつうなら、30分程度で着く距離を倍近くかかってホテルに着いた。この地区は、かなり前は、洗練された高級なブティックが並ぶ日本の銀座のようなところであったが、現在では、ごたごたと混み合った新宿のようになっていると、説明された。立派な地下鉄駅や低層の古い建物が立ち並ぶ街路を左右に眺めながらの移動であった。ホテルの窓から、遠方に青い山脈が連なっているのが見えた。心を和ませてくれる風景であった。新宿では、山など見えないであろう。

夕方には、まだ時間がある。連れとふたりで街をぐるっと散策することにした。何か、見えてくるものがあるだろう。平日なのに、かなりの人が歩いている。メスティソの若ものが多い。スペイン人と先住民が混血し、現在のメキシコの先祖を生み出したのだから当然である。エルナン・コルテス(詳細は、ふ

たたび、メキシコシティに戻ってから) がアステカ王国を滅亡させた1521年から1821年までの植民地時代の300年間、メキシコは、<ヌエバ・エスパニーニャー新スペイン>と呼ばれていたほど、スペイン帝国の数ある海外領土のなかでも最も重要な植民地であった。にぎやかな通りには、そのメスティソのメキシコ人の他に、目立ったのが先住民の姿であった。背の高い椅子に客を座らせて靴磨きをしている先住民の年輩の男性。物乞いをしている老婆と赤ん坊を抱いた若い女も先住民であった。そういえば、ホテルで重いスーツケースを運んでくれたポーターも先住民の若ものだった。チェが旅行中に出会った先住民の姿が思いだされた。黙々とおとなしそうで、あきらめたような無関心さで通っていく人たちを眺めている。このメキシコでも先住民の社会的地位は低いか、最下層といってもよい。

メキシコは危険であるという、川原さんの言葉を検証したければ、その国の新聞を読めばよいと、考えて「エル ソル デ メヒコ (16-02-2020)」を手にとってみた。まず、1面記事の若い美しい女性の大きな写真が目をついた。街頭には、女性たちが群がっている。「イングリッドの死によせて 暴力反対、男性による暴力はもういらぬ」の下には、メキシコシティで昨日に引き続いて行われたデモ行進で女性たちは、もう1人の犠牲者もだしてはならないと、叫んだ。「DV-ドメスティック バイオレンス」によって、2月8日にイングリッドが夫によって殺害された。そこに集まったのは、イングリッドの叔母とともに、同じ理由の暴力で犠牲になった娘たちの母親たちと町の大勢の女性たちであった。イングリッドが犠牲になった場所では、<マチスモ反対>の声があちこちで聞かれた。

「男らしさ」を強調する生き方を意味する「マチスモ」は、特に、メキシコのメスティソ社会の伝統的価値観である。一方で、ドメスティック バイオレンスは、世界中で起こっているし、最近では、日本でもたびたび、ニュースに取り上げられているので珍しいことではない。日本では、マチスモと結びついて

考えられてはいない。

一方では、ラテンアメリカのメスティソ社会において「マチスモ」という言葉には、つぎのような歴史的な意味がある。スペイン語の「マチョー macho」は、「雄」の意味で、力、勇気、誇り、性的能力に言及する言葉である。その言葉がラテンアメリカに入ると、インディオ的注釈が加わり、植物や物の大きさ、状態、力、その他の属性における優位性をも意味するようになった。ヨーロッパ地中海世界に共通に見られる家族や社会的名誉をにう男らしさを重視する傾向が、主としてスペインを通じてラテンアメリカに入り、定着したと考えられている。一般的に、女性にとっては、「マチスモ」は、「男性優位」を意味する。先記の抗議デモで、<マチスモを考え直せ>という女性たちの声が聞こえてきたが、数百年続いた伝統的価値観を男性から取り除くのは、簡単ではないだろう。デモ行進には、男性の姿がひとりも見えないのが、その答えではなかろうか。

家庭内暴力以外には、どんな犯罪が起こっているのだろうか。3面記事を拾い読みしてみると、メキシコではU.S.A.と同じように、銃社会であることが分かった。「去る金曜日、エル・ポバスとして知られているバルに男たちが押し入り、銃を乱射して3人の男性と1人の女性が射殺された。(Juventino Rosas)」、「1夜で別々の道路上で3人がピストルで射殺された。その中のひとりの犠牲者の女性は、元警官の犯罪学のエキスパートだった。3人の犠牲者は、それぞれ9ミリ口径のピストルで撃たれていた。第1番目の事件は、金曜日の夜11ごろに起こった。犯人たちは白い車から銃撃し、27歳の先の元警官は首、顔、腕と胸など、少なくとも9か所に弾痕を受けていた。2番目の犠牲者は、グレイの車の中で、少なくとも6か所に弾痕を受けていた。最後の犠牲者には、過去に犯罪による前科があった。(Tehuacán)」、「未成年者が、車で4人の若い女性を死亡させて、逮捕された。この地区では2日前に、テロ行為により逮捕された17人の最終裁判が終了したばかりであった。(León)」、「先週の

日曜日に、行方不明になった73歳のアルゼンチン人女性を探して、地区の警察および近所の住人たちにより、山地が探索された。最後に目撃されたのは、自宅近くであった。身代金の要求がないので、誘拐された疑いは退けられている。(Atacpan)」

これらは、16日付の記事によるものである。新聞に目を通していけば、毎日、同じような、あるいは、それ以上の犯罪が行われている可能性がある。

誰もが銃を携帯できる社会は怖いと思った。

日本に帰国する前には、再び、メキシコに戻って、テオティワカン遺跡やグアダルーペ寺院、市内観光をすることになっている。ここで、いったん、この国とお別れしよう！

(2) 第2日目、メキシコシティからブエノスアイレス (アルゼンチン) へ

1月31日 (金)

メキシコシティからおよそ9時間も飛んだ航空機が、ブエノスアイレスに到着したのは、夜の10時頃であった。メキシコとの時差により、3時間進んでいた。あらためて、中米、南米大陸の広大さを知った。

先記のメキシコの新聞 (2020-2-16) によると、目下、捜査中なので謎だらけだが、このメキシコ、アルゼンチン間が、麻薬密輸飛行ルートになっているらしい。メキシコは、アルゼンチンのうかつさを揶揄するように報じている。そう言われても仕方がないかもしれない。今年の1月末、およそ1千トンのコカインを積んだ飛行機が、メキシコに向けてアルゼンチンを飛び立ったことをアルゼンチン当局がテレビのニュースで初めて知り驚愕したと、報じている。すでに、メキシコ軍隊 (Sedena) は、ボリビア出身のふたりのパイロットを逮捕し、コカインも押収している。当日、離陸したとされているアルゼン

チン空港では、警察犬、税関など通常通り、全ての麻薬コントロールを行ったが、コカインを見つけ出すことはできなかったという。これにより、空港管理塔が離陸を許可した。その後のアルゼンチン側の捜査と推察によれば、アルゼンチンではコカインは積み込まれなかった可能性が強い。何故なら、ボリビアでは、1キロ、1500ドルのコカインが、ブエノスアイレスでは1キロ、4500ドルまで跳ね上がる。こんな割りのいい商売を麻薬組織が見逃すはずがないであろう。アルゼンチン当局は、先の1千トンちかいコカインは、ボリビアかペルーで運びこまれ、そこから最終目的地であるメキシコへ向かったと考えている。いずれにせよ、逮捕されたふたりのパイロットは単なる運び屋であり、裏には、アルゼンチン、メキシコ、ボリビアかペルーにまたがって、大きな組織が動いているようである。かなり前から、ブエノスアイレスはコカ密輸売買の基地になっている可能性がある、と考えられている。

すでに、知られているように、コカはコカインを含有する常緑の小低木で、原産地はペルーやボリビアのアンデス地方である。アンデス山系先住民は、2000年前から使用していたらしい。噛むと飢え、渇き、寒さ、疲労を忘れて活力がよみがえるような気持ちになるという。中央アンデスのインカ帝国では、コカは宗教的儀礼に不可欠なものであった。現在も、アマゾン流域の一部および中央アンデスの高地部の原住民社会では、コカを噛む習俗は一般的で、儀礼や日常生活にも利用されている。たとえば、ペルーやボリビアのケチュア族やアイマラ族は、乾燥したコカの葉を噛むと、飢え、渇き、疲れがいやされると信じて、野良仕事や採集や旅などに欠かせないものとなっている。スペイン征服、統治時代には、スペイン人はこの習俗を悪用して、1日にわずかな食料とコカの葉を支給してインディオに重労働をさせていた。

コカの葉から精製したコカインは、19世紀のヨーロッパでは薬用に使われていた。たとえば、外科手術のために麻酔作用のあるコカインが重用された。



コカとコカインの人体への化学的反応と影響はまったく異なる。先記のような麻薬取引で、高い価格がつけられるようになったコカインの原料となるココアの葉の生産と流通が、かなり以前から取り締まりの対象になって、先住民社会では大きな影響を蒙っている。ボリビアやペルーの農家では、麻薬組織によって無理矢理栽培させられているという話しは、以前からよく聞かれる。それにより、彼らと国の取締官との両方から先住民は圧迫を受けているのである。

(3) 第3日目、ブエノスアイレス、アルゼンチン 2月1日(土)

1) ブエノスアイレスの街を散策する

(1) 五月広場およびその周辺

スペイン語で<心地よい空気>という意味のブエノスアイレスの朝の街は、爽やかで、青い空が広がっていた。訪れた2月は夏の季節だが、平均気温が25度にも上がらず、長袖のシャツでちょうどよかった。人口330万人のアルゼンチンの首都、ブエノスアイレスの五月広場は閑散としていた。土曜日なのでオフィス、銀行などが閉まっていて、人の出入りが少ないせいであろう。

この広場で1810年5月25日、スペイン植民地政府に対して独立宣言を行った5月革命以来、現在まで5月広場と呼ばれている。大統領府(カサ・ロサーダ)、大聖堂(カテドラル・メトロポリターナ)、カビルド(スペイン植民地時代は行政機関として、独立後は市議会として使用されている)、博物館などの重要な建物が広場をぐるっと囲んでいる。

私が5月広場と聞いてすぐに思い出すのは、<5月広場の母親たち>である。あの1985年のアルゼンチン映画<オフィシャル・ストーリー>にえがかれて

いる勇敢な母親や祖母たちの姿が忘れられない。だから、この広場に来たときは感慨深かった。ここに立ったとき、映像にでてきた広場より狭いという印象を抱いた。

1976年から83年の軍事政権下の人権抑圧に抗議した若ものたちが、次々に連れ去られ行方不明になった。母親や祖母たちが息子や娘、孫たちを捜すために大統領官邸前のこの広場に集まり、デモを繰り広げて政府を告発した。政府の厳しい弾圧を受けて、この運動の参加者のなかからも行方不明者がでた。今でも、国際的に人権抑圧をアピールし、民政移管を促したこの草の根的運動の政治的な意義は評価されている。

広場の中央には、アルゼンチン国旗の創案者マヌエル・ベルグラーノ将軍の騎馬像がある。国旗はすっきりと洗練された色づかいとデザインで美しい。ブルーと白のストライプは空と海の青であり、自由と正義を表す。中央の太陽はスペインからの独立を表明する自由のシンボルである。騎馬像の前では、毎日、2時間おきに、ボリバル（シモン・ボリバル。拙著、中米およびカリブ海諸島への巡礼の道、その2を参照のこと）と並び称される、南米解放の父、サン・マルティン 近衛兵の交換式が行われる。

その場所から、古代ギリシャ神殿を思わせるネオ・クラシック様式のファサードをもった荘厳な大聖堂が見える。18世紀中頃から建設が開始され、1827年に完成したカテドラルである。12本の柱は12人のイエス様の使徒を表している。上部には、聖書の中の一団の人物像と思われるモチーフが彫られている。近づくと、壁には浮き彫りになった文字がつぎのように読めたくここに眠る ホセ・デ・サン・マルティン将軍および無名の兵士たちの 遺体が 独立のため（に戦った）彼らに敬意を表せよ！> そう、この大聖堂には、サン・マルティン将軍の柩がアルゼンチン、チリ、ペルーの聖女に見守られて安置されているのである。

サン・マルティン将軍 (1778–1850 年、General José de San Martín) は、ベネズエラのシモン・ボリバルと並ぶラテンアメリカの独立の英雄で、アルゼンチン、チリ、ペルーの解放に貢献した。スペイン人を父に持つアルゼンチン生まれのクリオージョ (中南米生まれのスペイン人) である。1812 年に独立軍に身を投じたマルティン将軍は、1818 年にペルーのリマを攻略してペルーの保護者に任ぜられた。アルト・ペルー (現ボリビア) の解放のために、ボリバルの支援を求めて、1822 年、エクアドルのグアヤキル市で両雄の歴史的会談が実現した。ボリバルは、当時ベネズエラとコロンビアを解放してエクアドルの解放に着手していたところだった。ボリバルから期待していた援助を得られぬことに失望したマルティン将軍は、独立戦争の指揮をボリバルに委ねてヨーロッパに向かった。

5 月広場は閑散としていたが、広々として立派な大聖堂内にはかなりの人がいた。床は大理石で敷きつめられ、つやつやと輝いている。上部の美しいステンドグラスから、サン・マルティン将軍の棺に朝の陽光が柔らかく射しこんでいた。入口近くの柩を護衛している若いイケメンの護衛官は、半袖の T シャツや短パンのメスティソや外国人の観光客に目もくれずにまっすぐに立っていた。

少し進んだところで目を引いたのが褐色のマリア様の像であった。それほど大きくはない。これは複製で本物の聖母像は、ここから北西へおよそ 65 キロほどのところにあるルハーン町のバシリカ (Basílica Nuestra Señora de Luján) に収められている。ルハーンは歴史ある町で、ブエノスアイレスを再建したスペイン人征服者フアン・デ・ガライ (Juan de Garay、後に詳細) によって建設された。聖母像は、アルゼンチン、ウルグアイそしてパラグアイ 3 国の守護聖人で、<われらのルハーンの聖母像—Ntra .Sra. de Luján >として知られている。サン・マルティン将軍をはじめとして、独立軍がしばしば、独立戦

争勝利のために詣でた奇跡の聖母像としても有名である。また、このバシリカを毎年、何百万というアルゼンチン人が訪れる。国民の70%以上がカトリック教徒である。

初めて、この聖母像がキリスト教信者であるポルトガル人によってブラジルから取り寄せられたのは、1630年頃であった。アルゼンチンの港から2体の聖母像が、牛たちにひっぱられている荷車に収められていた。かなりの距離を過ぎたところで牛たちが突然、座り込んでしまった。牛飼いがひっぽろうと棒で突こうが牛たちは動ぜず立ち上がる気配を見せなかった。そこがルハーンの町であった。付き添っていたポルトガル人の信者が一体の聖母像を荷車からおろした。それが、上記の聖母像である。そうすると、牛たちがようやく立ち上がって動き出したという。聖母様がどうしてもルハーンの町に留まりたいならと、小さな礼拝堂を建てて、そこに納めた。教区の神父様たちに認可された礼拝堂が建てられたのは、100年以上も経過した1763年であった。ルハーンの聖母様は、カテドラルに安置されているサン・マルティン将軍の遺体を現在にいたるまでお護りしておられるというわけである。

5月広場にでると、かなり強い夏の光がふりそそいでいる。アルゼンチン特有の樹木に咲く赤い花、ラ・パチュア、俗名エル・ボラチヨ（酔っ払いの意）が今、盛りで美しい。広場には、ぐるっと濃い緑の樹木が植えられていて涼し気な木陰をつくってくれているのでほっとした気持ちになれる。広場の周辺は歴史的に重要な地区になっている。現在、使用されていないような古い建物の壁にポスターを張ったり、落書きをするなどという警告を発する掲示板が見られるのもうなずける。また、歴史上の人物の名前が通りや地下鉄の駅につけられている。たとえば、ボリバルとかロカなど。ロカの場合、騎馬像まである。

アルゼンチンにとっては重要な人物らしいロカの名前を初めて聞いたので調

べてみると、そのとおりであった。ロカの軍人としての経歴を読み、私にとって見逃せない大切な事柄を見つけたので、ぜひ、ここにロカのことを書いておきたいと思った。フリオ・アルヘンティーノ・ロカ (1843–1914年、Julio Argentino Roca) は、アルゼンチンの政治家、軍人で2回も大統領に就任している。1858年以来軍人として内戦や対外戦争で数々の勲功をたてた。陸軍大臣時代の79年にパンパ地域のインディオに対する電撃的な掃討作戦を展開して地主層の支持を得た。(この事項は、後で詳細することにする)これにより、80年の大統領選で当選を果たした。外国から移民や資本を誘致して、農牧立国としてのアルゼンチン国を発展させた。1902年には、チリとの国境問題を平和裏に解決した。公平に見て、政治家としては、母国アルゼンチンに多大な功績を与えている。故に、ロカの名前をつけた通りがあり、騎馬像まである。

しかし、広大なパンパにもともと居住していた先住民にとってはどうであろうか。

ケチュア語で<平原>を意味するパンパは、アルゼンチンの大陸部面積のおよそ19%を占め、全人口のおよそ50%以上が居住する。樹木も少なく、丘陵や山塊がない平原が延々と続く平地である。ブエノスアイレスが含まれるパンパの東部は、農牧業の最適地になっている。チリにまたがるパンパの西部は、年間降雨量が少なく、灌木の多い不毛の地がほとんどである。西部には、<アラウカノ族—マプーチェ> (拙著、中米およびカリブ海諸島への巡礼の道<その1>のプロローグを参照のこと)、また、東部のラ・プラタ川 (ブエノスアイレスとウルグアイのモンテビデオ間を流れる川) 周辺には、<ケランディエ族>をはじめとする狩猟的生産様式を持つ諸族が、居住していた。アルゼンチンでは、スペインからの独立を契機として、パンパの中心部における私有地化した広大なエスタンシア (大牧場) が生まれていた。さらに私有権の未確定なフロンティアの土地、本来インディオの占有地が官有地化されたのである。土

地を取り上げられたインディオの激しい抵抗に対して、先記のロカ陸軍大臣による掃討作戦が実行された。これにより、この地域のインディオはほとんど絶滅された。それ以来、官有地が分割払いされてパンパの内陸周辺部には自営農が成立し、ラテンアメリカの大土地所有制が生まれた要因となった。アルゼンチンのパンパの農牧業は飛躍的な発展をとげ、今日でもパンパは国の農牧業の7割近くを産出している。

チェ・ゲバラは、アルゼンチンとチリにまたがるパンパを旅行中、何回か大牧場主の家畜小屋や厨房に泊めてもらったことがある。そこでは、大勢の先住民が小作人として早朝から夜遅くまで働かされていた。彼らと一緒に朝ごはんを食べたことがあったが、白人に不信感を抱いているらしい彼らは、チェたちが話しかけても返事すらしようとしなかった。土地の占有者であった祖先の末裔の悲哀にみちた様子は、ほとんど500年前のスペイン植民地時代と変わっていないようである。

ちなみに、イタリア移民は農業移民としてパンパの発展に寄与し、一部は商業、工業部門でも成功を収めた。

イタリアは古くから、スペイン、ポルトガルと並んでラテンアメリカと特殊な関係を維持してきた。新大陸の〈発見〉者コロンブスをはじめ、大陸にその名を冠したアメリゴ・ベスプッチ、ラ・プラタ川地域を探検したセバスティアン・カボットたちは、イタリア人であるということを忘れてはならない。しかし、不思議に思われるが、イタリアはラテンアメリカに植民地を持つことはなかった。アルゼンチンはスペイン系、イタリア系の白人が90%以上を占め、残りが白人と先住民の混血メスティソ、先住民、その他の人種で構成されている。街で先住民を見かけることはほとんどなかった。第2次世界大戦中はユダヤ人がここに逃げてきたが、戦後はドイツから残党ナチスまで逃げてきて匿われたことがあった。

それだけ、アルゼンチンは懐の深い国なのだろう。

(2) カミニート、ボカ地区 (タンゴ発祥の地)

ブエノスアイレスの中心部、5月広場から南東へバスは走っていく。左手には、ラ・プラタ川の支流リアチュエロ川が見える。右手には、碁盤目状の街路に沿ってヨーロッパ風の高層建造物が立ち並んでいる。人出はなくひっそりしている。ほとんど50年ぐらいここに住んでいる日本人男性ガイドは、平常は人の行き交いでとても賑わっている界限だという。20分ぐらいでリアチュエロ川の河口にちかい左岸にあるボカ<スペイン語で口の意>の港町に着いた。

かつては、移民船の船着き場でもあった。19世紀初期以来、イタリア系移民、とくにジェノバ人が多数住み着いた。ちなみに、コロンブスはジェノバ出身である。彼ら移民たちがタンゴを愛してタンゴ隆盛の一因になったといわれている。

リアチュエロ川の曲がったところから始まるカミニート (小径) を歩き始める。ブルー、黄色、グリーン、薄茶色などのカラフルな色で壁、テラス、屋根が塗り分けられた建物が立ち並ぶ小径である。ぞろぞろと歩いているのは、みんな観光客らしい。建物の壁に飾ってある絵画や通りの彫刻品、オブジェなどを足を止めてじっくり観賞していく様子は、まるで野外美術館にいるようである。実際にその目的で作られた小径なのである。毎日、修行中の画家たちが自分の作品を持ってここに集まってくる。カミニートはボカ生まれの画家キンケラ (1890-1977年、Benito Quinquela Martín) のアイディアによるものである。ラ・ボカをこよなく愛し、船着場、そこで働く労働者などをテーマにした多くの水彩画の傑作を残した。国外でも高く評価されている。数々のタンゴの名曲を残している親友のやはりボカ生まれの詩人フィリベルト (Juan

de Dios Filiberto) の〈カミニート〉を不滅にするためにキンケーラがこのような路地公園を作った。

一群の建物の中でもひと際目立つ建物がある。ふたつの小径が交差したところに建てられている。戸口の上に〈CAMINITO-カミニート〉、その文字の上に〈HAVANNA-ハバナ〉と書かれているのが目を引いた。ああ、やっぱり、強く心に響いた。後にアルゼンチンタンゴの発生について述べるが、キューバの首都、ハバナはスペイン人征服者により 1500 年代初期に建設された。そのキューバのダンス音楽、ハバネラのリズム感がアルゼンチンに伝わってタンゴを生んだとされている。その建物の壁の下部はグリーンで、上部は水色、その後方部分は上から下までイエロー、屋根はレンガ色に塗り分けられていて、遠くからでもとても目立つようになっている。だれも正面の戸口の上の赤い枠で囲まれた CAMINITO の文字を見逃さないだろう。その上のブルーのバルコニーからサッカーボールを抱えてお馴染みのアルゼンチンのユニホームを来たマラドーナの人形が立っている。国民的英雄である 1970 年代に活躍したサッカー選手である。世界的にもサッカーファンの間で有名である。サッカーはアルゼンチンだけではなく、ラテンアメリカでもっとも人気があるスポーツである。このバルコニーに立つ人形は時々交換されているようである。

タンゴは先記のハバネラのリズム感をとり入れたのと同様に、アフリカ系黒人の太鼓を伴う踊りのリズムにも関連しているらしい。ブエノスアイレスにも昔は黒人系住民が多かった。彼らの行列の音楽であるカンドンベ—candonbe が影響しているようである。先記の場末町、ボカに生まれたタンゴは、1900 年以前までは、下層社会の音楽として上中流社会から蔑視された。それ以降は、パリで認められ流行してから、全市民的な音楽としての地歩を築くようになった。その踊りは、はじめ男ひとりのソロ・ダンスであったが、のちに男 2 人が組んで踊るようになり、さらに男女で組む踊りとなった。

今回の大型クルーズ船では、幾夜か本場のアルゼンチンタンゴの名曲と踊り



を堪能でき、一生の思い出となった。私はモダン・タンゴの第1人者と呼ばれているアルゼンチンのピアソラが大好き。〈ブエノスアイレスの四季〉、〈アディオス・ノニーノ〉など、魂を震わせるような数々の名曲がある。タンゴ特有のバンドネオンは、他の楽器にはないような特別な哀愁にみちた響きがある。

### (3) 文化のシンボル、コロソ劇場およびエル・アテネオ書店

バスは走って来た街路を戻り、5月広場の横を進み、バスターミナルに突き当たり、左に曲がった。少し行くとコロソ劇場の前にストップした。どっしりとした建物はミラノのスカラ座につぐ世界第2の大きさと、パリのオペラ座と合わせて世界3大劇場とされている。1908年に完成した劇場は有名なイタリア人建築家による設計である。イタリア・ルネッサンス様式の劇場内に入って見学する時間がなかったのが残念であった。立ち見を含めると4000人もの観客を収容できる広さがある。シーズン中にはオペラ、バレエなど100以上のプログラムが上演される。さすがは、南米のパリとうたわれている330万の都市、ブエノスアイレスである。すでに、1900年代初期に文化のシンボルである立派なヨーロッパ風なシアターが建設されていたのである。

思いだすのは、チェが1951年の第1回目の南米旅行中に訪れたチリやペルーで、アルゼンチン人のチェは、たびたび、〈アルゼンチンは夢のような国〉と憧憬をこめて言われたことである。他の南米諸国は、貧しく、素朴でローカルぽかったのであろう。ブエノスアイレスのように高度に洗練された都会は、やはり、ヨーロッパから来た移民たちによって造り上げられたものなのである。しかし、同時に社会的格差の大きい国でもあったらしく、初めに革命を起こすことをチェが考えていたのは、ボリビアではなく、アルゼンチンだったようである。ただ、まだ準備が十分に整わず、時期尚早と考えてボリビアでゲリラ活

動を始めた、といういきさつがある。

コロソ劇場からそれほど遠くない距離にあるエル・アテネオ・グランド・スプレンドイド (El Ateneo Grand Splendid) の入口の前には、10代らしい若い短パンの女の子たちが群がっていた。土曜日の休日に書店に本を探しに来たアルゼンチン人か、私のような観光客か分からなかった。世界の美しい書店ランキング2位に選ばれたこともあるほど美しい書店で、観光スポットになっている。1919年に建てられた〈グランド・スプレンドイド劇場〉を利用した書店だけあって中に入ると、そのネオクラシックな華麗さに驚かされる。地下1階と地上4階がイルネーションに照らされて、本に囲まれたシアターにいる錯覚をおこさせる。アテネの神殿を描いたロゴと〈El Ateneo—エル・アテネオ〉の文字が浮かんでいる黒いカーテンが下ろされているステージがカフェになっている。十数人の客たちがぐつろいでコーヒーを飲んでいる。今では、書店の中にあるカフェは珍しくないが、このような華やかなシアターの舞台にいて、それぞれが役者を演じているカフェはとてもユニークである。

カフェちかくの本棚をめぐる私は、ある本を探していた。ふつうの本の並べ方はタイトルだけをこちら側に向けたものなので、手に取って表紙を眺める必要がある。その本だけは表紙を見せて立てられていた。ああ、やはり、まだまだ人気があるのだと、うれしくなった。反乱軍の最高位である司令官〈コマンドアンテ〉の地位についてのお祝いにカストロから贈られた、金色の星型のホセ・マルティ (プロローグ参照) 勲章を飾った黒いベレーは、被っていないが、葉巻を口にくわえた若々しいチェが満面の笑みをたたえていた。さっそく、傍にいた店員に聞いてみると、外国人観光客が、チェがアルゼンチン人だということに興味を持ってくれるし、ここブエノスアイレスでもコンスタントに売られている。中年以上や大学生などが買っていく.....そういえば、市内だけでも40以上の大学がある教育に熱心な町なのである。ところどころの街路の壁には、

飢えと貧困撲滅のスローガンが落書きされている。高齢者より若ものの方が多い都市という印象を受けた。

正午ちかい夏の日が輝く美しいブエノスアイレスの街を、私たちのバスは、クルーズ船の待つ港へ向かってひたすら走っていた。アディオス、また、来るね。お別れはいつも哀しい。心の隅のどこかでは、一期一会と分かっているから.....

## 2) スペイン人による征服および統治

まだ見ぬ未知の世界への出発を待つ間、スペイン人が初めてアルゼンチンに到着してからの足跡を少したどってみたい。これから、ブエノスアイレス港を出港し、南大西洋を南下してマゼラン海峡を通過し、南米大陸最南端のホーン岬をぐるっと周り、ドレーク海峡を通り過ぎて南太平洋を北上してチリのサンアントニオ港へ入港するまでの15日間の間、海を眺められるのである。まだ、知らない世界、驚きの連続であろう世界を知ることができるという胸の高鳴りを抑えるのが難かしかった。

1516年、スペイン人として初めてソリス (Juan Diaz de Solís) がラ・プラタ川 (Río de la Plata、銀の川—ブエノスアイレスの北東に位置し、大西洋に流れこんでいる。ちかくに大きな港がある) 周辺を探検した。当時、その地域には、およそ30万人以上の先住民の諸族が住んでいたと推定される。そのひとつの遊牧民であるチャルア族 (後に詳細) によってソリスは殺害された。そのずっと後の36年にメンドサ (Pedro de Mendoza) がブエノスアイレス市を建設した。しかし、原住民との抗争により、5年後には放棄しなければならなかった。ふたたび、町が建設されたのは、数十年後の1580年、ガライ (Juan

de Garay) によってである。しかし、原住民のたびたびの襲撃に加えて、貴金属が十分に発見されなかったことにより、16世紀から17世紀のアルゼンチンの開発は遅れた。広大な土地だけには恵まれていたこの地域では、牛皮の生産を主軸とする牧畜業が細々と営まれていた。

ところが、1776年、スペイン本国で統治する国王の代理が任命され、派遣されて、地域一帯(今日のアルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイ、ボリビア)を統治するというビレイナト (Virreinato—ラ・プラタ副王制) が設置された。最高官吏であるビレイ (Virrey—副王) は、ほとんどがスペイン生まれの、スペイン人 (ペニンスラールと呼ばれていた。中南米生まれのスペイン人であるクリオーリョは一段低いと考えられていた。彼らの対立は深かった) であった。

他のアメリカ諸国では、76年以前からこの副王制が設置されていた。たとえば、メキシコ、ペルーなど。16、17世紀の副王は上流貴族出身者であった。18世紀以降になると、小貴族、中流階級出身者および啓蒙精神の持主などがいた。ちなみに、アメリカ大陸の初代副王はコロンブスである。このような副王制が設置されるようになったのは、つぎの理由による。スペインの植民地経営の基礎は、1492年 (コロンブスの新大陸発見) から1550年 (スペイン国王、カルロス1世により征服一時停止令を發布) にいたる発見、征服時代に築かれた。スペイン国王は、当初、コロンブス、コルテス (メキシコ征服)、ピサロ (ペルー征服)、その他代表的なコンキスタドール (とくに、16世紀前葉の征服者) たちに全面的な政治権力をゆだねたので、彼らは征服地においては君主のような存在となった。彼らにも言い分がある。彼らの征服は、国王の認可を必要としたが、自らの生命と全財産、すなわち、全人生を賭けた個人的な事業であり、ほとんど国家の財政的、人的援助はなかった。(拙著、〈中米およびカリブ海諸島への巡礼の道〉を参照のこと) そのため、軍の規模は小さく、投機的性格をおびた企てであった。たとえば、コルテスは当初600名ほどの兵士

でアステカ王国を滅ぼし、ピサロは200名たらずの兵士でインカ帝国を滅亡させた。また、太平洋を発見したバルボアは、当初千名の兵士を必要として国王の応援を求めたが、得られなかった。結局、わずか190名の兵士を連れて、現在のパナマシティを建設した。このように、コロンブス以来の新世界の危険な未知の地域、多くは、セルバ（密林）で、コンキスタドールたちは、大部隊の原住民を相手に闘って黄金、財宝を手に入れてきた。一方で、彼らは、キリスト教を未知の世界の人びとに伝えたいという使命感をも併せ持っていた。

王室は、君主のような存在となったコンキスタドールたちの権力の削減に努め、中央集権化を図った。16世紀半ば頃には、新大陸の政治組織は決定的な形を整えた。

アルゼンチンを中心に広大な地域が、リオ・デ・ラ・プラタ副王領として組織化されたころから、地域の経済は、にわかに活況を呈するようになった。なかでも、副王領首都となったブエノスアイレス市の港が、本国スペインとの交易に開港されてから、ヨーロッパ産品とパンバ畜産品との中継地として急成長を遂げるにいたったのである。副王制は、1810年5月25日にブエノスアイレス市の市議会が副王を廃し、自治委員会の設置まで続いた。

大型のクルーズ船が何艘も係留できる広大なブエノスアイレス港を出港したのは、夕方7時、少し前であった。まだ見知らぬモンテビデオ（ウルグアイ）に向けて、クルーズ船は、鏡のようになめらかで、一すじの光が射す南大西洋をすべっていった。しだいに暮れなずむ水の上すれすれに濃いオレンジ色の帯が広がり、そのまたすぐ上には金色の帯が広がっていく光景にデッキから離れられなくなってしまう。遠方の高い建物にちらほらとやさしい灯りがともされていく。ふたたび、なつかしい黄昏から夜までの魔法にかけられたような美しいはざまの刻々を海上から、こうして五感のすべてで体験できる幸せを感じ

た。黒々とした建物の灯りが増えていくにつれ、オレンジ色と金色がますます鮮やかになっていく。

やがて、最後の光芒も消えて、分厚い闇の外海へ、船は静かにすべり出た。

(4) 第4日目、モンテビデオへ、(ウルグアイ) 2月2日(日)

海 永遠に よせてはまたかえし

ああ 一すじの思惟ののちにかえりくるもの

神々の静謐の面に じっと注がれた眼差しよ..... <ヴァレリー>

静謐をたたえている濃紺の海と、薄いブルーの空の下にモンテビデオの港が遠方に見える。まだ、早朝の港のひっそりと、たよりない明るさの中に暗い陰のようにぼうっと高層ビルが浮かんでいる。近づくにつれて近代的な港町が目の前に広がっていく。ラ・プラタ川を隔てた対岸のブエノスアイレス港までの距離は、わずか200キロである。

#### 1) モンテビデオの街、スペイン植民地時代の旧市街を散策する

広々とした港からバスに運ばれて最初に着いた所は、独立広場である。日曜日のせいか、街は静寂に包まれている。広場にいる人たちも観光客ぐらいである。この爽やかな夏の朝の日曜日は、ウルグアイ人は教会でミサに与っているのだろう。スペイン系、イタリア系など、およそ350万人の国民の90%が白人でカトリック教徒が多い。先住民はほとんどが絶滅した。メスティソもわずか8%ぐらいしかいない。

からっとした明るい青空の下、独立広場は、広々としていた。中央には、威

風堂々としたホセ・アルティガス (1764–1850 年、José Gervasio Artigas) の騎馬像があった。1811 年、ウルグアイの独立戦争で軍隊を率いた英雄である。1516 年、ラ・プラタ川からウルグアイの地に、ヨーロッパ人として初めて上陸したのは、先記したソリス (Juan Diaz de Solís) である。遊牧民チャルア族に殺害された後のスペイン人の入植はだいぶ遅れた。この地に金銀などの財宝が発見されなかったからである。およそ、200 年後の 18 世紀前半、スペイン人がモンテビデオの町を建設し、先記したリオ・デ・プラタ副王領 (第 3 日目、ブエノスアイレス 2) スペイン人による征服と統治、を参照) の一部となった。アルティガス将軍は、先記の 1811 年、ブエノスアイレス市の自治政府と協力してスペイン統治からの独立を目指して、解放運動を起こした。しかし、中央集権制に固執するブエノスアイレス市と対立を深めた後に、アルゼンチン軍を一掃して初の自治政府を築いた。そして、アルティガス将軍は、1828 年にウルグアイを分離独立させる素地を作った。

モンテビデオの街は旧、新市街とも、定規できちんと測ったようなきれいな碁盤目状に作られている。設立者がよほど几帳面な性格だったのではないかと思ってしまう。18 世紀前半、南米各国を支配下においていたスペイン人の設立者かもしれない。独立広場から西には、立派な石畳と古い建物の旧市街が広がって、スペイン植民地時代の栄華の面影を偲ばせてくれる。そのひとつが独立広場から旧市街へ開かれた城門 < Puerta de la Ciudadela > である。いろいろな形状の石を積み重ねて造ったどっしりとした城門である。およそ、300 年間持ちこたえただけのことはあると、高い城門を見上げた。あまりにも碧く、あまりにも透明な空が広がっていて、当時の空も同じように、こんなに美しい空ではなかったかと一瞬思ったら、胸が少し高鳴った。辺りには、甘い空気まで漂っている。ここだけには、短パンと T シャツ姿の観光客が群がっている。人びとは、ノスタルジックな気持ちで、なるだけ古い建造物に興味を抱くのか

もしれない。

城門から道路を隔てた向かい側に、＜TEATRO SOLÍS—ソリス劇場＞が眺められた。シンプルでそれほど大きくない建物である。この地に最初に足を踏み入れたスペイン人探検家ソリスの名を冠した、19世紀半ばに建てられたウルグアイ最古の劇場であり、先記したブエノスアイレスのコロン劇場よりもさらに古い。また、ここに来て、南米における文化の水準の高さを目の当たりにすることができた。実際に旅をしながらそういうことを知る喜びにいっぱいになった。屋根には、長さの違う光の輪に囲まれた目鼻がついた太陽が彫られている。この太陽は先住民の独立のシンボルである。ウルグアイの旗にも、太陽が描かれている。現在の劇場の内部には、先進の技術がほどこされてオペラやコンサートが開催されている。

1830年、最初の憲法発布を記念してつけられた＜憲法広場＞を通りすぎ、北へ数ブロック歩いて港の前にある市場＜Mercado del Puerto＞に着いた。

今から、およそ150年前に建てられた古い港市場である。アルゼンチンと並んで、牧畜業が盛んなウルグアイでは、国民は肉類をもりもり食べる。市場の中では、＜パリージャー網＞でジュウジュウ焼く＜焼肉＞のレストランがたくさんある。まだ、昼ごはんには、少し早いですが、焼肉のいい匂いがあちこちに漂ってきて鼻腔が刺激される。それは、チェの南米旅行にたびたびでてくるアサード＜Asado—焼肉＞を思いださせた。チェと友人のアルベルトは、いつも＜サメ＞のようにお腹を空かせていて、時たま、大きくて分厚い肉の一片を焼いたアサードを運よく手に入れたときの幸福感を伝えている。チリへ入る前のアルゼンチンのある村では、＜家の人はとても親切に迎えてくれ、ラム肉の美味しいアサードで空腹を癒してくれた。＞（モーターサイクル南米旅行日記、チェ・ゲバラ）アルゼンチンでは、牛、豚、ラムなどの肉に塩を少々ふりかけ



てじゅうじゅうと焼いて食べるのが日常の食習慣なのである。それに野菜をたっぷり添える。今回の旅で、このようにして、いろいろな焼肉をいただいた。

港市場から海とは反対方向の大通りの坂道を登っていくと、両側に土産物店が並んでいる。さらに、上の方に登っていくと、海拔わずか137メートルに過ぎないセーロ< Cerro一丘 >が見える場所がある。1520年、マゼラン(1480-1521年、Fernando de Magallanes)が、この地を通過したとき、このセーロを見て、<モンテム・ビデオーわれ山をみたり>と、叫んだ。それで、モンテビデオと命名されたと、言われている。頂上からは、モンテビデオ湾と市街の素晴らしい風景を一望に見渡せるらしい。頂上に登るには時間が足りなかったので、もう少し、大通りを上の方に登っていく。日曜日のせいか、ほとんど人の姿が見えない。スペインのアンダルシア地方でよく見かける真っ白な家々が並んでいる一画もある。ドアの横には、いくつかの植木鉢が置かれている。蔓が伸びて上の方に小さな濃い緑の葉っぱが生い茂っている。枝々からは、南国らしいピンクの花が華やかに、喜々とした風情を見せて咲いている。南米では、今、生きとし生けるものが生成の頂点に達した盛夏なのである。

この一画には、スペイン系の人たちが住んでいる雰囲気は漂っている。親近感が湧いてきた。すこーんとしたブルーの空に白い壁の家にピンクの花の取り合わせは、完璧であった。さらに、上に登っていくと、壁とドアと屋上が水色で塗られて、フクロウと猫の顔がイラスト風に描かれている住居があった。その横の家の壁一面には、インディオの女と想像上の奇妙な動物が描かれていた。この一画には、メスティソか、先住民の子孫が住んでいるのではなからうか、と勝手に想像してしまう。ひっそりとした日曜の昼下がりの街路には猫いっぴもいない。

ああ、やっと、人の姿が見えた。うれしくなった。マンションの窓ごしにふたりの銀色の髪をした女性が、道路にいる女性と何か飲みものを手にして話している。感じのよさそうなオープンな微笑みを浮かべているので、プエノスディアス、今日は、と挨拶を送る。マテ茶を飲んでいるの、と問う私に、マテ茶に興味があるならと、道路にいた女性が向かいの建物に入り、パンフレットを持ってきてくれた。マテ茶についての説明が書かれていた。3人の女性たちがウルグアイ人は、マテ茶なしには、生きられない、わたしたちの文化の大事な一部なのと、話しているのを聞いておかしくなった。同じようなことをチェが南米旅行日記で書いていたからである。

アルゼンチンのある村のエスタンシア（農場）の農園労働者の厨房で1夜を過ごした翌朝の5時には、<どこもかも煙と苦いマテを飲む人びとでいっぱいになった。>そして、チェたちが飲む、この辺りでは甘口マテと呼ばれているマテの嫌味を言われたりする。この農園で働いているのは、征服されたアラウカノ族（チリ中部に住んでいたが、アルゼンチンには、移民として大勢入ってきた。）で、今は自分たちを搾取している白人に対して、不信感を抱いているのか、農園や仕事について尋ねても肩をすくめるだけで、何も答えようとはしなかった。（上記、チェ・ゲバラ）

チリのある出入国管理官は、アルゼンチンで働いていたことがあった。<彼はマテ茶に対する僕らの情熱をよく知っておりまた理解していたので、お湯とパンをくれた上に.....>（チェ・ゲバラ）また、ペルーに入ってから、或る村で真っ暗な夜になってしまったのに、家のありそうな兆しは全く見えず、もっと悪いことには、<食事や少しばかりのマテ茶をこしらえるための水も持っていなかった>（チェ・ゲバラ）マテ茶は、熱い茶のほか、冷たくしたのも好まれるのである。その後、とうとう、寒さに震えながら朝の6時まで歩きつづけ、ついにあばら屋を見つけ、そこの素朴な人びとに親切にしてもらい、<...マテ茶がこれほどまで体力を回復してくれると感じたことはなかった。>

(チェ) 事実、マテ茶にはビタミン A、タンニン、1%のカフェインが含まれていて、先住民が薬用飲料として飲んでいて。(後に詳述)

ペルーの海拔 5000 メートルの山道をトラックにのせてもらって登っていたが、途中で故障して動かなくなってしまった。寒さに凍えていたチェは、少しばかりの雪を温めてマテ茶をこしらえた。すると、トラックと一緒に乗り合わせたインディオたちが、<奇妙なまじい飲み物を飲んでいる僕らの見せていた光景は、インディオたちにとって、.....とても興味深く見えたらしく、絶えずそばに寄ってきては、.....> (チェ) そのへんてこな器具に水を注ぐのかと質問してきた。その器具とは、メタルでできたマテ茶用の容器である。そこに、葉をたっぷり入れ、湯を入れて専用の管(ファイバークラスでできたストロー)でかきまぜて、しばらくしてから管で吸って飲む。誰にとっても、他民族の習慣は奇妙にうつるらしい。

チェたちが、チチカカ湖へ航行できるペルーのプーノという村に着いた。その漁師たちは、みんな純粋なアイマラ族(アンデス地方のボリビアとペルー国境のチチカカ湖周辺の高原地帯を中心に居住する。アイマラ語を話す人々は、20 世紀後半でおよそ、150 万人いる。祖先はインカ帝国の被征服民族で、インカ期に現在の地方に移住させられた)でスペイン語は、全く分からなかった。チェが雇ったガイドによると、アイマラ族の漁師の中には、まだ一度も白人を見たことのないものもあり、先祖代々の慣習に縛られて生活しており、衣装やしきたりや伝統を汚れひとつないままに保っている。チェが足りなくなっていたマテの葉を探したが、ボリビアの北部では、ほとんどマテは飲まれることはなかった。日記の中のマテ茶の記述は、枚挙のいとまがないので、こころへんでやめよう。それほど飲まれているマテ茶、大げさではなく生きる力を与えてくれるマテ茶の起源を調べてみよう。

グアラニー (Guaraní) 族の薬用飲料で、マテはグアラニー語である。グアラニー族は、ラ・プラタ川の河口からさかのぼったパラグアイ、アルゼンチン、

ウルグアイ、ブラジルの一部に居住していた。現在は、直接の子孫は非常に減少し、パラグアイ、ブラジル、アルゼンチンの3国、国境地帯におよそ、2万人が残っている。グアラニー系のチリグアノ族は、現在のボリビア領に入り、インカ帝国と戦った。パラグアイの公用語は、スペイン語とグアラニー語である。グアラニー族は、村落同士、しばしば戦い、捕虜は食べられてしまうことが多かった。かつて、スペインの支配下にあった時、自らの伝統文化から離脱したものが、少なからずあった。

マテは、ブラジル南部からアルゼンチン北東部の山地原産の常緑樹、マテ・パラグアイチヤノキである。樹木の高さは3～15メートルで、葉は厚く、4～10センチもある。その葉を熱気で乾燥させ、砕いて茶とする。

17世紀頃、ヨーロッパにおけるお茶を飲む習慣が、南米、とくにパラグアイ、アルゼンチン、ウルグアイに広く伝わった。最初は、地方の田舎で信頼のおける仲間同士で苦いマテ茶を回し飲みしていたが、後に都会へも広まった。

一般的に、マテ茶はグループの仲間、家族、同僚、学生たちが、同じ容器、同じ管を使って、湯を注ぎたしては、人から人へ回し飲みをしていく飲みものである。これは親密な仲間意識のシンボルである。また、訪問客に温かいマテ茶をだすのは、歓迎のシンボルである。これが、他の飲みもの、コーヒーや紅茶とは、大いに異なっている点である。

さて、チェとアルベルトが旅に出ることを決めたとき、アルベルトの兄弟も集まって、<マテ茶をひと巡り飲むことで、自分の夢を叶えるまでは諦めないことを2人とも確かに約束したことの証とした。>（南米旅行日記、チェ・ゲバラ）

ウルグアイの3人の女性たちは、マテ茶のひとつの容器を回しながら飲んでいたが、私に勧めようとはしなかった。初対面の人には、誰であれ、そうしな

い上記の理由があるのだ。どんなにアルゼンチン人のチェがマテ茶を愛してしていたかを話すと、目を輝かせて、互いにうなづき合いながら興味深そうに聞いてくれた。アルゼンチンとウルグアイはライバル同士の時代があったが、今は兄弟だからと、笑う。

現在のモンテビデオは、南米で最も生活水準の高い町とされている。感じのいいウルグアイ人の女性ガイドによると、公立病院および公立の小学校から大学まで無料である。しかし、私立であれば、病院も学校も支払いは高いという。また、治安についても、他の南米諸国に比べて、比較的安全である。人びとは、コスモポリタンで優しく、あたたかい。〈南米のスイス〉と呼ばれていた一時期があったが、現在も、その評価は当たっている。2人が覗いている窓のマンションも立派で堂々とした建造物である。時間をかけないで素早く建ててしまうちゃちな造りの日本のマンションとは、大違いである。ヨーロッパでは、たびたびその違いを思い知らされてきたが、ブエノスアイレスやモンテビデオの街路の広さ、統一のとれた街づくり、堅固でいて洗練された建造物を眺めてきて、効率だけを求める日本の都会の街づくりは、優美とか品格とは程遠く、醜悪でさえある、と感じた。

居住しているマンションにマッチした白い肌と黒のワンピースの彼女たちのお茶をすする仕草も優雅であった。

## 2) 遊牧民、悲哀のチャルア族

街の中心地から北へ4キロのところにブラド公園がある。そこへ行くまでの街路は広く、道の両側には緑濃く茂る樹木が植えられている。コロニアル様式の別荘や多くの大使館が建ち並んでいる閑静な高級住宅街であり、大使館エリアでもある。

ブラド公園には、ウルグアイの激動の歴史を象徴するふたつブロンズ像が建

てられている。先住民チャルア族とモンテビデオ開拓時代の銅像である。前者の像には、消滅した祖先への哀切の思いが込められている。後者のそれは、先住民消滅後に開発された牧場で生産された商品を牽いていく牛車を記念したものである。

まず、先住民、インディオのブロンズ像を見ることにする。4人のインディオがそこにいる。ふたりは、女性らしい。真ん中には、先記した親密な友好関係のシンボルであるマテ茶の容器が床に置かれている。回し飲みをしているのだろう。像の回りにある3枚の石板を読めば、彼らが誰で、何をしていたのかだいたい理解できる。像の題名、〈インディオ チャルア諸族—INDIOS CHARRUAS〉は、石板に大文字で彫られている。その下に小文字で〈セナカピアマカーピル グジュヌサ タクアベ—SENACA VIAMACA-PIRU GUYUNUSA TACUABE〉と彫られているのは、4つの部族の名前と推測される。4人のインディオの像がそれぞれの部族の名前であろう。彼らは、一堂に会して何をしていたのだろうか。傍の石板がこう説明してくれる、〈インディヘナの子孫たちの最初の出会い 彼らの祖先への敬意を表して 1988年11月5日〉

ほとんど絶滅してしまった祖先たちだが、幸いにも上記の日付に残った子孫たちが以前、彼らの占有地だったこの牧場で最初の出会いを果たしたらしい。現在のウルグアイのインディオ人口は、皆無に近く、90%以上が白人である。

これらの2つの石板よりかなり大きい石板が像のちかくに道路に向かって建てられている。プラド公園を訪れるみんなに読んでもらいたいという意図が込められているのだろう。そこには、チャルア族がほとんど絶滅した理由が次のように彫られていた。〈1833年、東方のチャルア諸族は捕虜として、パリへ連行された。彼らの母国へは、二度と戻ってこられなかった。チャルア諸族

は、不屈の勇気で自由を守るために、3世紀の間、2つの帝国の軍事政権に対して高貴なホセ・ヘルバシオ・アルティガス将軍および母国の英雄たちとともに戦ってきた。チャルア民族の子孫たちによる協会設立を祝して 10周年を記念して 1999年>

1833年という年に注目してみたい。スペインを含めた他国からの独立後である。先記のように、アルティガス将軍は1811年に独立運動を率いたウルグアイ国の英雄である。後に連邦主義のリーダー格だった将軍であったが、ポルトガル軍の侵略を受けて、1817年に政権の座を追われて影響力も低下した。1820年には、ポルトガル軍との戦闘に敗れてパラグアイに逃れ、そこで30年間の亡命生活を送った。ウルグアイは、1821年から27年まではポルトガル側のブラジルに併合された。1828年にやっと完全な独立を達成することができた。しかし、独立後は、ふたつの政党の対立が激化して内乱にまで発展した。それは、インディオ部族間の紛争を巻きこんで繰り広げられた。

上記の石板の2つの帝国のひとつは、スペインであることは明白である。先記したように、1516年、初めてスペイン人の探検家ソリスがウルグアイに上陸して、チャルア族に殺害された。スペイン統治が1811年まで、3世紀続いた。もうひとつの帝国は、スペイン植民地時代を通じてずっとスペインと争ってきたブラジルを植民地として統治していたポルトガルであろう。チャルア諸族は、ウルグアイにまたがるブラジルまで広範囲に居住していた。両国のおよそ300年間における植民地時代に、彼らは、少しずつスペイン人、或いは、ポルトガル人によって消滅していった。殺害されたり、或いは、改宗をせまるスペインカトリックのイエズス会を自ら受け入れたりした。或いは、スペインやポルトガル軍に恭順して彼らとともに彼らの敵と戦った。或いは、スペイン人と結婚して混血のメスティソになった者もいた。後に、彼らの多くは、広大なパンパで野生牛（スペイン人が植民地時代に牛などの家畜を南米に初めて、持ち込んだ）を捕獲する勇敢な gaucho（牧童）になった。gauchoは独立戦争

時には、独立軍とともに戦ってきた。独立後のパンパ開拓時代には、しばしば、狩猟的生産様式を維持していたマイノリティのチャルア諸族と戦わなければならなかった。

スペインからの完全な独立後の1830年、ウルグアイ東方共和国（ウルグアイの正式名）に最初の憲法が公布された。最初の大統領は、アルティガス将軍とともに独立のために戦ったこともあるリヴェラ将軍（1788–1854年、José Fructuoso Rivera）だった。第1回目の大統領の期間は、1830–1835年である。彼の政権下に組み込まれた先住民もいたが、反抗した先住民は、先記の1833年に、パリに連行されて、ウルグアイには決して戻ってこれなかったのである。

先記したアルゼンチンの軍人たちによるパンパのインディオ掃討作戦を思いだしていただきたい。< 1) ブエノスアイレスの街を散策する、(1) 5月広場およびその周辺 >

ウルグアイもアルゼンチンと同様に、農牧国で大地主が広大な土地を所有している大土地所有制が敷かれている。それらの土地は、以前は先住民の占有地であった。19世紀初頭には、ほとんど消滅していたが、わずかに生き残った生粋のチャルア諸族は、勇敢で好戦的であった。農牧国として発展させるためには、まだ開発されていない、彼らインディオが占有している土地を官有地にする必要があった。そこで、リヴェラ将軍の指揮の下で軍隊を動員して抵抗を続けるインディオ駆逐作戦がとられた。アルゼンチンと同様に、外国移民、外国資本が入ってきて、ウルグアイは発展をとげた。フランスからの資本も受け入れていた。チャルア諸族を捕虜としてパリに送ったのも、フランスと経済的な関係を強化する意味があったのであろう。

先記したブラド公園にあるもうひとつのブロンズ像は、19世紀後半のモンテビデオ開拓時代の牛車である。馬に跨り、棒を手にしたひとりの gaucho が



毛皮など、牧場で生産された商品を輸送している。最後の先住民も駆逐され、本格的にパンパが開発されていった時代を記念して、ブロンズ像が建てられた。イタリアで作成された像は堂々として、リアルで見事な芸術作品である。8頭の牛が重そうに牽いている牛車にたくさんの商品が積まれているらしいことが分かる。

こうして、19世紀後半以降、ウルグアイ、特にモンテビデオ周辺の広大な未開発だった平原は、飛躍的に牧場として発展していくのである。しかし、その陰で多くの先住民が犠牲になったことを忘れてはならない。その目的で建てられた2つのブロンズ像である、と思う。

プラド公園から出発して間もなく、波静かな青い大西洋が車窓の左手に眺められた。浜辺の前の道路には、何台もの車が駐車していた。ぶらぶらと何人かの人が海岸を歩いている。右手のロドー公園 (El parque de Rodo) には、ショートパンツ姿の若い女の子たちや年輩の男女、家族連れなどがくつろいでいる。公園前の道路には、何らかの土産物がたくさんテーブルの上に並べられて売られている。何人かの人たちが熱心に品物を手に取ったりしている。

いつもののどかな日曜日の光景かと思っていたら、2月2日の今日は、特別なお祭りの日だと、先のガイドが説明してくれた。<イエマシャーの日—Día de Yemaya>という宗教的な祭りの日で、この目の前に広がっている<ラミレス海岸—Playa de Ramirez>に信者たちが集まっているらしい。もちろん、中には、このきれいな浜辺を単に訪れにきた観光客もいるであろう。まだ、まだ、太陽がまぶしい午後で肌を焼くには、最適な時間なのだから。<イエマシャー>は、<海の母>の名前で、海の女王である母の息子たちは魚だとする、アフリカのナイジェリアの神話に基づいている。大航海時代のスペインやポルトガルの植民地である新大陸、とくにブラジルに<イエマシャー信仰>が、アフリカから黒人奴隷とともにもたらされた。後に、この<海の母>とカ

トリックの＜聖母マリア様＞が融合される。キリスト教は、スペインにより征服された中米、南米の大多数の国で土着宗教と融合している。黒人やメスティンがほとんどいない現在のモンテビデオでは、このイエマチャー信仰の信者の大多数は白人だそうである。

夕陽が最後の光を放ち、海を真っ赤に染めるころ、信者たちがぞくぞくとこの浜辺に集まってくる。海のかなたに太陽がすっかり沈みきるまで、信者たちは浜辺に座っている。やがて、荘厳な光芒がきらきらと赤く反射している波の上に聖母さまがお立ちになるのが見えると、聖母様を見守りながらお祈りを捧げる。あたり一面に黄金いろの光が輝きはじめると、信者たちは立ち上がり、用意していた小船を海の聖母に向かって放つのである。うらぼんの最後の日に、海や川に流す日本の灯籠流しと同じような光景である。小船には、花やワインの小さなビン、灯りのともされた小さな祭壇などのお供え物が積まれている。ゆらゆらと無数の灯りが暗くなった海面いっばいに流されていく壮観としかいいようのない光景が目の前に繰り広げられている。信者たちは、ためいきをつきながらいつまでも、いつまでも立ちつくしている。ある年には、10万人とも推定されている信者たちがこの海岸に集まっている。信者たちは、ヴェルレーヌ（フランス、1844-1896年、フランス象徴主義の代表的存在）が詩っている海の聖母さまを、確かに見ているにちがいない、

＜大寺院よりもなお一層　美しいのが海、

……

聖母さまが波の上にお立ちになって　祈っておいで下さる海！＞

さあ、そこまで届け、お供え物を乗せた小舟よ、しっかりと見届けるまでは帰るわけにはいかないぞ！

(5) 第5日目、船は、南大西洋をプエルト マドリン (アルゼンチン) へ

2月3日 (月)

昨日、まだ陽の高い午後3時半頃、モンテビデオとお別れした。真っ白い優美な船体に色とりどりの星を描いたクルーズ船は、パタゴニアへの玄関口、プエルト マドリンへ向けて終日、やすむことなく、抱いては去っていく青い波原を進んでいた。

1日中、ぼうっと水平線のかなたまで広がっている海を眺めていればいい僥倖の時間がとまってくれればという願いも虚しく、後尾に白波を立てて船はひたすら前方へ進んでいく。船上では、水着姿の外国人たちが日光浴をしたり、プールで泳いだりしながら、それぞれのひと時の喜びを享受している。

ヴェルレーヌの先記の詩はこう続く、……

< 広大無辺の大海原は 酸いも甘いも解ってくれる。

……

明るく笑う空のもと 青いと見ればばら色に グレーと見れば浅みどり、  
海は誰より美しく 海は誰より親切だ！>

(6) 第6日目、バルデス半島探検、アルゼンチン

2月4日 (火)

薄明の銀色の空にも海にも、しばらくすると、薄い金色が輝き始めた。銀と金のさざ波を立てて、船が速度を落とすと、はるか彼方に陸が現れた。プエルト マドリンだろうか。胸が高鳴ってきた。コロンブス一行が、スペインの港から未知の大海原に船を西に進めて、37日目の1492年10月12日に始めて陸(カリブ海の島のひとつ)を見つけた時の喜びは、どんなであったろうか。< 陸が見えるぞー > と叫んだ男の声がそこら中に鳴り響いた。たしかに、私の

耳にも。すぐ目の前には、白い高層の建物が並んでいる。バルデス半島に最も近い、大西洋側のパタゴニアの玄関口であるプエルト マドリンに入港したのは、午前10時を少し過ぎていた。人口9万人以上の近代的な海岸リゾート地で、ホテルやレストランが多数ある。こんな早朝に水着姿の男女が浜辺や浅瀬を散歩している。南半球の2月は、人の五感をもっとも高揚させる盛夏なのだ。人々は、午後の燃えるような日光を避けて、早朝の爽やかな潮風を全身に浴びたり、ひたひた押し寄せる海水に足を浸したりして、やがては、去って行ってしまう夏のひと時を享受しているのだ。

南米最南端のパタゴニアを訪れたいと、思ったのは、10年前ごろからであった。世界の最果てにある、世界でもっとも美しい大地と言われているパタゴニアの写真を憧れの気持ちでたびたび、眺めていた。

南米大陸は13の国と地域で構成され、その中を背骨のように縦断しているのが世界最長のアンデス山脈である。およそ、8000キロメートルにおよび、南北約4000キロメートルの細長いチリとアルゼンチンを東西に分断している。両国内の南緯40度よりも南の地域を＜パタゴニア＞という。アンデス山脈が南氷洋に沈むホーン岬までを含む広大な地である。地図上の緯度を何回も確かめながらエッセイを書くのは、とても楽しい作業である。

＜パタゴニア＞という語源については、1520年に当地に到着したマゼラン一行が先住民の足跡を見て＜大きな足の意味のパタゴニア＞と命名した。一方では、先住民の用語で＜荒い海岸＞の意とされる。北東パタゴニア、アルゼンチンのバンパに住む先住民には、グアナコ（ラクダ科のリヤマに似ている動物）などの小動物の狩猟で生きるテウエルチェ、プエルチェ、ケランディ、チャルアなどの諸部族がいた。＜テウエルチェ＞は、北西パタゴニアのマプーチェ族（アラウカノ族に属する）の言葉で＜南部の人＞の意味だが、それが部族名として定着してしまった。別名パタゴニア族とも呼ばれている。先記の大きな足を持った巨人だったという。不毛の草原を駆け抜ける遊牧民の住居のテ

ントは、グアナコの皮を伸ばし木柱に被せた簡素なものだった。生粋のテウエルチェ族は、ほとんど絶滅し、現在はそのメスティソがアルゼンチンの北東部から南東部にかけて数千人ぐらい住んでいるらしい。

今、プエルト マドリンを出発したバスが乾燥した草原の中を走っている。展望台があるカレタ・バルデスまで、150 キロメートル以上の距離をかなりのスピードをあげて走っている。しかし、グアナコ (Guanaco-Lama guanicoe) が生息している場所では、ゆっくり走り、探してくれる。この道をたびたび走りぬけているガイドはよく、知っているのである。ここは、グアナコ、パタゴニアウサギ (Mara-Delichtis patagonia)、アルマジロ (Peludo-Chaetophractus villosius)、野生馬、鹿などの生息地である。バルデス半島一帯は自然保護区なので、これらの動物はしっかりと保護されている。バスの両側には、延々と草地が続いている。車が走る舗装された2車線の道路脇に動物たちは、なかなか近づいてくれない。結局、2時間ちかく走って2、3頭のグアナコを写真に収めることができた。映像でよく見るリヤマより、首や四足が長くほっそりしていて優美な姿である。走るのがすばしこそうである。パタゴニアウサギは、いっしょうけんめい目をこらして、1匹だが、草に隠れているのを見つけられた。また、遠方には野生馬が草を食んでいた。

目の前に薄青い海が広がっていた。紺青いろの空を覆っている雲がほとんどすれすれに海のちかくにあった。やっと、バルデス半島の東側に位置する大西洋に面した入江に到着した。ここ、カレタ・バルデス (Caleta Valdes) には、レストラン、展望台、博物館がある。もちろん、お目当てのマゼラン ペンギン (Pingüino de Magallanes-Spheniscus Magallanicus)、南ゾウアザラシ (Elefante Marino-Mirouga Leonina)、オタリア (Lobo Marino-Otaria Flavences) などの希少動物が浜辺にいる。

博物館にはいると、アルゼンチンの国旗とくようこそ、バルデス半島の自然

保護地区に着きました。探検してください>という歓迎の言葉が述べられています。昼食後、展望台に上るとくあなたの現在いる位置>という言葉が床の地図に記されている。半島は3つの湾に囲まれている；サン・ホセ湾（Golfo San José）、その前に広がっている大きなのが、サン・マティアス湾（Golfo San Matías）で真後ろのがヌエボ湾（Golfo Nuevo）。また、床に書かれている<パタゴニア大地>の文字の下には、弓矢と槍を持った上半身裸の先住民が描かれている。

今、パタゴニアの大地を踏みしめているのだという、実感が体中にぞくぞくと伝わってきた。

遊歩道から下の浜辺を見おろすと、数十羽のマゼランペンギンの愛らしい仕草が眺められた。首をかしげたり、2羽、3羽とぴったり寄りそったりしている。両翼を広げてお尻を振りながら歩いているものもある。思わず、声を上げて笑ってしまう。両翼を広げるのは、温度調整のためらしい。暑いときは、広げて脇から熱を放散している。海風は爽やかに吹いているが、午後の陽が燦々とペンギンたちに降りそそいでいる。以前よりその数がずっと減少しているというガイドの話に、胸に痛みがはしる。世界中からやってくる観光客が増えたせいだという。そうか、私もそのひとりなんだ、と考えこんでしまう。数十年前なら、こんな最果てにあるパタゴニアまで来るのは、とても困難だったのに、最近では、何と簡単に来れてしまうのだろうか。南米最大の白黒のマゼランペンギンの営巣地は別の場所にある。プエルト・マドリンから200キロメートル南下した<プンタ・トンボ>である。今回は、クルーズ船はそこを素通りした。そこには、何十万羽のペンギンが浜辺を埋め尽くしているらしい。

その浜辺からもう少し下っていくと、海岸の波打ち際に数十頭の南ゾウアザラシがぴったり体を寄せ合って横になっていた。昼寝でもしているのだろうか。海岸までは下りられないようになっていたので、こんな遠方からしか目をこらすしかない。<ゾウ象>という名前がついているだけあって、かなり、

図体が大きいことは分かる。60万頭いたゾウアザラシが19世紀には、絶滅しそうになったという。

また、このバルデス半島（1998年、世界遺産に認定）には、クジラの聖地と呼ばれている場所がある。ここ、カレタ・バルデスからおおよそ、西方へ80キロメートルにある半島のつけね近くのプンタ・ピラミデ（Punta Pirámide）である。5月から12月の8か月間のホエールウォッチングのシーズン中には、毎日、海上に50人ぐらいは乗れるウォッチング船が出て、大変なにぎわいになるようである。船上から30から40頭のクジラの壮観な行動、大ジャンプ（ブリーチング）、手羽部分（フリッパー）を海面に打ち続けるタッピング、尾びれを上げ海中へ潜る行動—テールアップなど、長い間、眺めることが出来るという。数十頭のクジラがいっせいに潮をふくときに〈ウエー—ウエー—〉と歌うのが海上に鳴り響くのが圧巻だと、参加した人たちが口をそろえて言う。歌をうたって親子が交信をしているというのが自然の摂理にかなっている。親は何を子どもに伝えているのだろうか。ここ、バルデス半島のクジラは全部、南セミクジラで〈セミ〉は、背が美しいという意の〈背美〉である。巨大な体につけられたロマンティックな名前である。

およそ3か月後には、この周辺の海にこんな素晴らしいショー、自然からの贈りものを観賞できるのは人間にとって大いなる喜びである。

アルゼンチン人は、マテ茶を回し飲みしながら、おしゃべりをしている時がいちばん、幸せであると、聞いていたが、プエルト マドリンへの帰りのバスの中で、ガイドのセバ스티アンと運転手のカルロスがそれを証明してくれたのが、とても愉快であった。チェの南米旅行日記で、他国を旅している間に、マテ茶がきれると、わざわざ、アルゼンチン大使館まで出かけてマテ茶をもらいにいくという記述が数回見られたが、おおげさではなく、アルゼンチン人はマテ茶なしには、生きられないのである。

セバスティアンのカルロスに対するねぎらいの気持ちもあるのであろう。用意して持ってきていた魔法瓶から容器に湯を注ぐと、まず、カルロスに手渡す。運転をしながら器用にストロー〈銀製の菅〉で何回か吸る。それをセバスティアンに手渡す。セバスティアンが何回か同じように吸る。すでに先記したように、マテ茶には、疲労をとり、リラックスさせる効果がある。雑談をしながら、笑い声を立てながら飲むマテ茶は、その効果を倍増させるだろう。大勢の観光客を後ろにして、彼らはラテン系らしいおおらかさ、屈託なさを存分に発揮していた。セバスティアンは、笑顔でちかくにいた私とも会話をしてくれる。地元の人と話せるチャンスをのがしたくはなかった。40歳の彼は、7歳の娘と妻のために精力的にガイドの仕事をこなしている様子がかげがえした。同じアルゼンチン人として、チェ・ゲバラについて問うと、アルゼンチン人はいまだにチェを愛している。マルクス主義者としてではなく、信じている事を実行する人間として。コンフォートな生活から抜け出して、世の不正をただすために生きた人間として愛している。チェが執筆した本およびチェについて書かれた本も全部読んだという。また、7歳の娘にも、自分の信念を貫いて世間の物指しにとらわれずに自由に生きるように教えていると。相当、チェについて詳しい、チェの本質を理解している、アルゼンチン人であるチェを誇りに思っているという印象を抱いた。残念だが、現在のアルゼンチンは、チェが生きていた頃のアルゼンチンとあまり変わっていない。中流層は薄く、貧困層は厚い。しかし、南米の中では、ウルグアイとアルゼンチンがまだ、社会的格差の点では、ましな方だという。

明るく、善良そうなセバスティアンとカルロスにお別れする 때가 やってきた。さっきから左手にヌエボ湾のきらきら光る午後の海を眺めて走ってきたバスがプエルト マドリニに着いたようだ。中点の太陽の下の浜辺では、少年たちがいくつかのグループにわかれてボール遊びをしていた。まだまだ、無限にちかい時を持つ走り回っている少年たちを少し羨望の眼で眺めながら、彼方で



待っていてくれるクルーズ船へ向かった。

夕方、7時半過ぎに船は出港した。紺清の海上と空に惜しげもなく黄金いろの光をまきちらす太陽は、今まで見たこともないさまざまな色彩に彩られている。真っ白い大きな玉をぐるっと囲んでいるのは、真っ黄色。さらにそれをぐるっと囲んでいるのは、淡いオレンジ色である。オレンジ色はあたり一面に広がっている。海は誰でもヴェルレーヌのような詩人になってしまうらしい。

(7) 第7日目 船はつぎの寄港地、フォークランド諸島、イギリス領（アルゼンチン名はマルビナス諸島）の首都、スタンリーへ進んでいく

2月5日（水）

プエルト マドリンを出港した船は、南へ南へと下っている。この日は、どこにも寄港せず終日クルージングである。だから、船の旅が好きだ。

デッキチェアで1日中、船上を吹き抜ける風を胸いっぱい吸い込み、頬に感じながら、今まで撮ったアイパッドの写真や地図、ガイドブックなどを見ながら、メモを整理する。時々、海や空やむくむくと湧いてくる雲を見上げる。鳥たちが無垢な喜々とした悦びの声をあげながら輪を軽快に描いてすばやく視界から消えていく。海は、また、色の魔術師である。さまざまな色彩の変化によって、なまめかしくなったり、荒々しくなったり、無邪気になったり、よそよそしくなったり、華麗になったりと、いろいろな姿態を見せてくれる。

中原中也の詩をふとおもいだす、

くお天気の日、南の沖は	なんと、あんなに綺麗なんだ！
お天気の日、南の沖は、	まるで、金や、銀ではないか

金や銀の沖の波に、	ひかれひかれて、岬の端に
やって来たれど	金や銀は
なおもとおのき、	沖で光った。>

(8) 第8日目 スタンリー、イギリス領

2月6日(木)

薄いグレーの綿菓子のようにふわふわした一面の雲が、海にほとんど被さっているが、低い山並みが連なっているのが、くっきりと遠方に見えた。みるみるうちに、島が目の前に迫ってくる。大型の2艘のクルーズ船が平行して進んでいる。

明るい早朝に島から少し離れた場所に船が錨をおろした。投錨地点から30分後に、小さなはしけにテnderボートが着くと、<ようこそ、フォークランド島へ>の言葉に迎えられた。透明な青い空の下に英国風な洗練された家々が島の片側に海に向かって並んでいる。どの建物も壁が白く、屋根はおちついた赤、窓枠も赤が多い。白と赤のコントラストが綺麗である。壁が黄土色で、屋根が紺青、緑もシックな調和がとれている。庭園に、ルピナスやその他の白、黄色、ピンクの花などが植えられているのも英国風である。

この島については、おおざっぱな予備知識しか持っていないので、まずは、もう少し先にある歴史博物館へ向かって歩いていくことにする。そこで、何か重要な情報が得られるかもしれない。私は直感力が強い。

今いる島は、南米最南端に近いマゼラン海峡の東方の入り江からおよそ500キロメートルの南大西洋に浮かぶ諸島のひとつである。1833年以来、イギリスの属領とされてきたが、現在に至るまでアルゼンチンと領有権をめぐる争いが続いている。それ故に、英語とアルゼンチン名(スペイン語)との2つの名

称がある。〈Falkland Islands and Dependencies- フォークランド諸島〉および〈Islas Malvinas- マルビナス諸島〉である。地図を見ると、大きな島が西と東にある。周りに200あまりの小島がある。テンダーボードが着いた首都スタンリーは東フォークランド島（アルゼンチン名はソレダード島）にある。前記のマルビナス島とは、西フォークランド島をさす。

〈誰が最初に島を発見したのか?〉という問題は、すなわち、〈誰に統治権があるか〉ということである。イギリス側は、1592年イギリス人航海士ジョン・デービス (John Davis) が到来し、1690年、イギリス人フォークランド卿にちなみ同諸島を命名した。1843年、イギリス総督府を設置して総督を任命したことによって、現在に至るまでイギリス領であると、主張する。他方、アルゼンチン側は同諸島へは、ジョン・デービスより以前の16世紀前葉にスペイン人かポルトガル人が到来している。1774年にはスペイン総督府を設け、1816年、スペインから独立したアルゼンチン側に同諸島は組み入れられたと主張する。およそ、150年が経過した1965年の国連総会で平和的領土交渉の開始が決議されたが、その後、両国間の領土紛争が激化した。1982年4月2日、アルゼンチンは同諸島へ侵攻し、フォークランド戦争が勃発した。最新型の兵器による戦闘で、両国は多大の人命、戦費を費やし、同年6月14日、アルゼンチンの敗戦が決定した。これぐらいの知識しかない。アルゼンチン側が主張するスペイン人とかポルトガル人とは、いったい誰なのだろうか。とても興味があった。それに、マルビナスという名前は聞いたことがあったが、フォークランドという名前には、なじみがなかった。

目指すものは、すぐ見つかった。博物館の入口ちかくにガラスのショーケースがあった。そこには、いくつかの額が掲げられていた。説明文が入っていた。いちばん大きい額の説明文には、〈誰がフォークランド諸島を発見したか?〉というもので、ずばり、私の知りたい事だったので嬉しくなった。イギ

リス側は、領有問題についてアルゼンチンとこれからも協議する意向がないことを表明しているが、ここ数年の調査で分かったことを認識していることが上記の説明文で読みとれた。要約してみると、＜長い間、イギリス人航海士ジョン・デービスがフォークランド諸島へ最初に到来したと信じられていた。しかし、忘れられた記録を掘り起こした最近の調査によると、最初に島を発見したのが、ほとんどポルトガル人らしいということが分かった。その発見は、およそ1518 - 1519年であったろうと思われる。何故なら、1519年9月にマゼランが出航する前に、セビージャでは、ペドロ・レイネルがパタゴニア沿岸周辺を航行していたことがすでに知られていた。1518年より前だったと考えられないのは、レイネルのパタゴニア航行以前のその周辺の地図がひとつもなかったことによる。最初の発見者が誰であれ、確かなことは、島に上陸しなかったか、発見を名乗りでなかったということである。＞

上記の説明文に付け加えたいのは、1519年マゼラン隊は、世界一周航海に向かい、1520年にフエゴ島 (Tierra del Fuego) を探検し＜火の島＞(南米大陸南端とマゼラン海峡を隔てて向かい合う三角形の島)と命名した。フォークランド島周辺も探検したようである。その後、南米大陸南端をまわって太平洋にでた。1520年のマゼラン一行の探検の後には、フォークランド島の海図が多数現れている。1522年のペドロ・レイネル (Pedro Reinel) の海図 (Circulus Antarcticus - 南極圏) が、その中でもより精密にフォークランド諸島を作図している。ペドロ・レイネルは、ポルトガル人の海図作成者である。この明白な海図により、1592年、ジョン・デービスが発見したと、イギリスが主張していることが否定されるのである。

ショーケース内のつぎの説明文も読んでみた。それによると、＜別のイギリス人航海者のリチャード・ホーキンス (Richard Hawkins) が、1594年フォー

クランド島を航行して、島に火を見たことにより、人が住んでいると、判断した。しかし、ヨーロッパ人が入植する以前、原住民が住んでいたということは証明されていない。故に、彼が見たという火は、雷なのではないかと、考えられている。彼は、エリザベス女王〈バージン・クイーン〉に敬意を評して、島を〈Maidenland- バージンランド〉と命名した。18世紀後半までいくつかの海図には、この名前と〈Hawkins Maidenland〉—ホーキンス バージンランド名がつけられている。

リチャード・ホーキンスは、彼以前のジョン・デービスの探検を無視したことになる。フォークランド島には、ヨーロッパ人入植の前に先住民がいたのであろうか？ 明白な証拠がないので、現在まで、いなかったと、されてはいるが、つぎのような仮説が研究者の間で、立てられているので紹介してみたい。〈フォークランド島にかつていたとされる狐と狼の混血種である Guara-グアラーは、カヌー・インディオのヤマナ（ヤーガン族）の飼い犬であった。そこから、ヤマナが、しばしば、島を訪れていたのではないかということが推測されるのである。このヤマナは、先記のフエゴ島に住んでいるのと同じ原住民である。初めは、ヤマナの飼い犬であったグアラーは、後に、島に孤立して生きるようになってから野生化したと、考えられている。この仮説によると、フォークランド島に最初に到達した人間は、後に、アルゼンチンやチリ周辺にまたがって居住していた原住民であるということになる。フォークランド島の檣の先端部分やカヌーの遺物の発見は、考古学的な証拠として上記の仮説を裏付けているようである。また、ヨーロッパ人入植の時には、樹木がなかったにもかかわらず、木片が発見されたことも証拠となっている。しかし、一方では、パタゴニアから潮流によって木片が流れついた可能性もあるとしている。〉

現在では、狩猟で生計を立てていたヤマナは、絶滅してしまったと考えられ

ている。

これらの説明文の横には、船の模型が置いてある。ジョン・デービスが航行してきた船く The Desire-希望>である。< 1592 年フォークランド島に最初に到来したと記録されているジョン・デービス一行が乗船してきた Desire の模型である。エリザベス様式の商船と同じサイズとデザインを持っている >

イギリスは、船の模型を作成し、展示することで、あくまでも、フォークランド島はわが国のものであることを誇示しているように思われた。

この島には、2つの教会がある。博物館のちかくに、真っ白い壁に赤い屋根のついた清楚なたたずまいのカトリック メアリ教会 (St Mary's Church) がそのひとつである。1899 年に、現在の場所に移されたゴシック様式の教会である。19 世紀にイギリスによる入植が始まると、イギリス人とともに少数ではあるが、スコットランド人が入植した。スコットランドはカトリックの国であり、イギリスは英国国教を信じている。この教会はスコットランド人のためのものである。< Saint Mary >は、< 聖母マリア >の意であるが、エリザベスの宿命的なライバルのスコットランド女王、メアリー・スチュアートの Mary を私に思いださせた。英国の歴史を少し知っていれば、英国国教会がいつ、どのような状況下で生まれたのかが分かるからである。エリザベス 1 世 <バージン・クイーン>の母親アン・ブーリンと国王ヘンリー 8 世との再婚騒動からローマ教会と断絶し、教皇から破門されてしまった。そこから、英国国教会が生まれ、イギリスはプロテスタントの国となった。ちなみに、メアリー王女は、ヘンリー 8 世と最初の王妃、スペイン王女キャサリンとの間に生まれた。エリザベスもメアリーもイギリスの正当な王位継承者である。それからのイギリスはプロテスタントとカトリックに分裂し、カトリック信者メアリーはプロテスタントを弾圧する。エリザベスとメアリーの間には、このような宗教

的、政治的な確執があった。後に、メアリーはエリザベス暗殺計画に乗せられ、1558年、処刑された。エリザベスが王位に就いた年である。

当時のイギリスの宗教戦争に着目した映画<エリザベス—Elizabeth, 1998年、シェカール・カプール監督>には、メアリーとエリザベスが互角に描かれているだけに、メアリーの波乱万丈に富んだ悲劇的な人生には、心が痛むのである。スコットランド人ならなおさらであろう。1年中、雨が多く、風の強い、諸島あわせて3000人が住んでいるフォークランド島の首都スタンリーにある小さなカトリック教会、St Mary's Church がメアリー王女に敬意を表しているのではないかと、つい考えてしまったのは、先記の映画が記憶の底から現れてきたからにちがいない。上記のリチャード・ホーキンスは、エリザベス1世の治世下(1558-1603年)の1594年に女王に敬意を表してフォークランド島を<Maidenland-バージンランド>と命名したことを思いだしていただきたい。

そんなことに思いを馳せながら、はしけ近くに建っているイギリス国教教会に向かった。シックな洗練された教会である。壁は、比較的小さな四角い石に覆われている。ついているたくさんの窓はレンガで縁取りされ、屋根もレンガ色で統一されている。入口の傍に<Christ Church CATHEDRAL>と書かれた掲示板が据えられている。外壁に十字架の紋とAD1892と彫られているので1892年に完成されたことが分かる。

中は、どこのプロテスタントの教会と同じように、シンプルでキリストの磔刑像はない。主祭壇の前の3つのステンドグラスから光が柔らかく射すばかりで内部は、ほの暗い。両側には、それぞれ4枚のステンドグラスが並んで、そこから微かな光が入ってくる。そこには、静かにお祈りを捧げたり、あわただしい日常生活から離れて、瞑想したりするのにふさわしい暗さが醸しだされていた。しばらくすると、外界の強烈な太陽と青い海でかなり高揚していた気持ちが落ちついてくるのが感じられた。そして、気づかされたのは、英国の歴

史の中でも、ヘンリー 8 世 (1491-1547 年) および、エリザベス 1 世 (1533-1603 年) のいちばん興味深い激動の時代が、まさに、大航海時代であるということだった。まだ、当時は、英国は<太陽の没することなき帝国>スペインとフランスに翻弄される小国に過ぎなかったのである。

夜 8 時頃、ティエラ・デル・フエゴ (Tierra del Fuego-火の国) の州都で最南端の町であるウシュアエアへ向けて船が出港した。南極へのツアー船がたくさん出航する港町である。船が出港するときは、たいてい、私はデッキにいる。ねずみ色の雲の下から顔をのぞかせた母なる大きな夕陽が、消えてなくなる前に、無数の子どもたちを海上に放ったかのように、波間には、金色のさざなみができていた。だんだん夕陽が小さくなり、水平線のかなたに点となり、消えてしまうまで、ウオーキングをしながらデッキで夜風に吹かれていた。

9) 第 9 日目 マゼラン海峡を通過し、ティエラ・デル・フエゴ (火の国)

のさらに南にあるホーン岬をまわり、ウシュアエアへ船は進んで行く

2月7日 (金)

南大西洋の朝方の空と海は、清澄な淡いブルーであった。ブエノスアイレスを 2 月 1 日に出港してから、およそ 3000km ちかくをひたすら南下してきた南大西洋とも今日でお別れだ。ここ数日の天候は良好らしい。天候しだいで、船長が航行の進路を決めていく。今日は、1 年中、激しい暴風が吹き、潮流も強いといわれている航海上の難所を通過して、目的地までいくようである。それだけに景観も素晴らしいのであろう。ホーン岬で海難に遭ったおよそ数百、数千の船が海底で静かに眠っていると、推定される。



フォークランド島からおよそ 500km を穏やかな海面をすべるように航行してきたクルーズ船がマゼラン海峡 (Estrecho de Magallanes-エストレチョ・デ・マガジャーネス) の入口に到達した。この大西洋側の入口の部分がアルゼンチン領であるほかは、すべて南部のチリ領である。海峡はおよそ 600km ある。先記したように、1520 年マゼランによって発見された。1843 年、チリ政府は、この海峡の領有を確定するため、海峡の中間地点にブルネス要塞 (後に詳細) を築き、さらに、その 6 年後にプンタ・アレナス (後に詳細) を建設した。私が昨年、通過した記憶にも新しいパナマ運河 (拙著中米およびカリブ海諸島への巡礼の道、その 2 を参照のこと) の建設までは、大西洋と太平洋を結ぶ重要な航路としての役割を果たしてきた。

デッキから眺めたマゼラン海峡は、幅広く、両岸も平たんである。さざ波は銀色に輝き、空は、薄いブルーでところどころにさっとひと刷毛で描かれた金色が、全体のモノトーンをうち破っていかにも綺麗であった。しかし、ときたま、遠方に山脈の青い影が見え、船が近くまで寄ると、黒々と大きな塊となった。右や左に眺められるそれらの山脈は、近くになったり遠くになったりを繰り返していた。複雑に入り組んだこのようなフィヨルドを航行していく船長の航海術は相当なレベルなんだと、ひとり感心していた。あたりの空気は薄く、蒼かった。厚手のフードつきのジャケットなしでは、デッキにいられないほど寒かった。南極圏ちかくまで船で運ばれてきたのだから当たり前である。とくに、船が進む前方にいれば、強い風がまともに顔に当たる。目を凝らしていると、2頭のクジラの頭部がもぐったり浮いたりしているのが見えた。この時期には、姿を現さない、と聞いていたが、確かにクジラである。周りの双眼鏡を持って野鳥を観察していた人たちも、クジラだ、クジラだと声を上げていたので、私の幻視ではなかったのである。体長はそれほど大きくはなかった。潮流に流されてどこかの生息地からここまで遊泳してきたのだろうか。

周りに氷河を頂いた鋭い峰々が多くなる頃には、空一面におおわれた夕闇の

雲の間に淡い黄か白の光が輝いていた。海面に反射した光は、銀色なのか金色なのか見分けるのが難しきほどきらきらしていた。ついに、ホーン岬 (Cabo de Hornos—オルノス岬)、南米最南端まで来てしまったのだと、感無量で胸がいっぱいになった。航海史や探検史において最も重要な岬のひとつである。1616年1月、ここをはじめて通過したオランダ人、ウィレム・コルネリウス・スハウテンの生地であるホールン (Hoorn) にちなんで命名された。

終日クルージングの今日は、食堂でゆっくりしながらウェーターと少し、おしゃべりができた。今回の旅は、ブエノスアイレス (アルゼンチン) 出港なのに、あまりスペイン語の話せる中南米出身者がいない。フィリピンやインドネシアなどのアジア系が多い。賃金がより低くてすむのだろうか。お互いに、それほど英語が達者でないせいか、メニューの注文をするのもスムーズにいかないことが多かった。メインダイニングには、3人のアルゼンチン人しかいなかった。その中のひとり、イリーナ (Irina) と仲良くなれたのは、嬉しかった。ブエノスアイレス出身の28歳だが、とても若々しく愛らしい。このクルーズ船で働いている乗務員は、全員8カ月間の契約社員だという。その期間が終了したら、また、新しい仕事を探さなければならないと、ちらっと不安な様子を見せた。ブエノスアイレスで正規雇用の仕事を見つけるのは、難しいらしい。まだ、ブエノスアイレス大学の人類学科を終了していない、仕事をしながら、なるだけ早く卒業したい、そうでないと、良い就職ができないと、言う。日本の若ものたちが抱える問題と同じよと、会話が弾んだ。イリーナは、肌の浅黒いクリオージョ (中南米生まれのスペイン人) である。アルゼンチンには、メスティソ (ラテンアメリカの人種混交) が、あまりいないと聞いていたけれど、と問うと、他のラテンアメリカ諸国と同じように、アフリカから奴隷として連れてこられ、鉱山や個人の邸で働かされた黒人との間のメスティソが少数ながらいるとのこと。まだ、現在のアルゼンチンでは、政治と宗教が堅く結ばれて

いる。70%以上がカトリックの国であることを反映しているように、大統領はカトリック教徒でなければならないという。その後も、レストランで顔を合わせると、イリーナとおしゃべりをしてきた。大学を卒業して、正規雇用の仕事につくまでは、結婚を考えられない、ブエノスアイレスの女性たちは、みんなそう考えているという話から、日本も含めて、世界中の自立を目指す若い女性たちと同じであることが分かった。同じレストラン（船中には、バー、ラウンジを含めてたくさんのレストランがある）で働いていたクリオージョのダリアともたびたび、話しをしてきた。ニカラグア出身である。ニカラグアの現状は、より深刻である。イリーナより若いので明るく、屈託がない。昨年、ニカラグアを訪れたというと、顔を輝かせて嬉しそうにしてくれた。船中の仕事は、長時間拘束されきついが、あちこち旅ができるので楽しいという。この8カ月間の仕事が終了したら、また、船に乗りたらしい。しかし、その度に応募しなければならないらしい。ダリアも結婚など、全然念頭になく仕事をした、仕事が楽しいと繰り返して述べていた。

船旅が楽しいのは、いろいろな国の出身者たちと、自由におしゃべりができることであろう。しかし、彼ら、彼女たちは、ウェイターとしていくつものテーブルを任されているので、おしゃべりに引き留めるのは難しかった。

(つづく)



カミニート、ブエノスアイレス  
アルゼンチン、タンゴの発祥地

チャルア族と筆者(上)、マテ茶容器(下)  
モンテビデオ ウルグアイ



書店エル アテネオ、ブエノスアイレス、アルゼンチン

## 参考文献

- モーターサイクル南米 旅行日記。チェ・ゲバラ。棚橋加奈江訳。現代企画室。東京。2004年。
- 第2回 AMÉRICA 放浪日記 ふたたび旅へ。チェ・ゲバラ。棚橋加奈江訳。現代企画室。東京。2004年。
- ゲバラ日記。チェ・ゲバラ。高橋正訳。角川文庫。東京。1999年。
- ゲバラ。アラン・アマー。廣田明子訳。原書房。東京。2004年。
- スペイン現代史。若松隆。岩波新書。東京。1992年。
- 物語 スペインの歴史。岩根罔和。中公新書。東京。2002年。
- 物語 メキシコの歴史。大垣貴志郎。中公新書。東京。2017年。
- ラテンアメリカを知る事典。平凡社。東京。1987年。
- パタゴニアを行く。野村哲也。中公新書。東京。2011年。
- エリザベス、ELIZABETH。トム・マグレガー。新潮文庫。東京。1999年。
- エリザベスとエセックス。リットン・ストレイチー。中公文庫。東京。1999年
- グレートジャーニー、人類5万キロの旅。関野吉晴。角川文庫。東京。2010年。
- 地球の歩き方、アルゼンチン、チリ、パラグアイ、ウルグアイ。1018-19年。ダイヤモンド・ビッグ社。東京。2017年。
- Viaje por Sudamérica. Ernesto Che Guevara, Alberto Granado. Editorial Abril. La Habana (Cuba). 1992.
- Inés del alma mía. Isabel Allende. Penguin Random House Grupo Editorial. Barcelona, España. 2005.
- Cartas de la conquista de México. Hernán Cortés. SAEPE. Madrid España. 1985.